

しも ご し い せき
下 古 志 遺 跡

—考察編—



2002年3月

出雲市教育委員会

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

しも ご し い せき
下 古 志 遺 跡

— 考 察 編 —

2002年3月

出 雲 市 教 育 委 員 会

序

近年、出雲市内では国道9号バイパス建設、新内藤川拡幅などの大規模な開発事業が、国や県によって進められています。特に古志地区は、斐伊川放水路建設や一般県道多伎江南出雲線改良など、大事業が集中して進められている地区であります。また、同時に、この地の歴史解明においても重要な弥生時代の人規模な集落跡が集中する、古志遺跡群が存在する地区でもあります。このため、古志遺跡群内では、平成7年度から島根県教育委員会や出雲市教育委員会によって、連続して発掘調査が実施されてきましたが、今年度をもっていざれの発掘調査も終了する運びとなりました。

このような状況の中、昨年度、出雲市教育委員会では一般県道多伎江南出雲線改良に伴う下古志遺跡発掘調査報告書を発刊しましたが、他の発掘調査が進行中であったため、その成果を盛り込んで考察を加えるまでには至りませんでした。

本書は、古志遺跡群内の大規模調査が終了したこの時期に、先の出雲市教育委員会が実施した下古志遺跡発掘調査の成果を軸に、近隣の発掘調査成果を盛り込み考察を加えようと試みたものです。本書が、さらなるこの地の歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、本書の刊行にあたりまして、ご指導、ご協力を賜りました関係者の方々に心からお礼申し上げます。

平成14年(2002)3月

出雲市教育委員会
教育長 多久 博

例　　言

1. 本書は平成13年（2001）3月に出雲市教育委員会が発刊した、『下古志遺跡 一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』の成果を元に、周辺の発掘調査成果も盛り込みつつ、下古志遺跡の性格や時期について考察を加えよう試みたものである。
2. 本書で主に取り扱う遺跡は、下古志遺跡（旧：正蓮寺周辺遺跡）である。
3. 下古志遺跡の所在は、島根県出雲市下古志町及び古志町地内であり、位置は北緯35度20分20秒～30秒、東経132度44分20秒～30秒である。
4. 本書の作成は次の組織体制で行った。

編集機関　出雲市教育委員会

事務局　板倉　優（出雲市文化企画部　芸術文化振興課長）

川上　稔（同　文化財室長）

三原　一将（同　文化財室副主任主事）

米田美江子（同　文化財室主任嘱託員）

5. 本書の執筆及び編集は、米田と三原が協議して行い、文責は目次に記した。
6. 遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。
SI：竪穴住居　SB：掘立柱建物　SE：井戸　SK：土坑　SA：櫛列　P：柱穴　SD：溝状遺構
SX：その他の遺構　＊但し、下古志遺跡第1次発掘調査のE区～G区では、柱穴の数字上二桁は所在グリッドの下二桁を示す。
7. 本書で用いた北はすべて座標北を示す。他の文献から用いた北も、必要なものは変換を行った。
8. 本書の写真図版に掲載した航空写真を除く写真的撮影は、米田と三原が行った。



目 次

序

例 言

目 次

挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 下古志遺跡と周辺の発掘調査 . . . (三原)

第1節 下古志遺跡の発掘調査	1
第2節 下古志遺跡周辺の発掘調査	2

第2章 下古志遺跡の時期 (三原)

第1節 第1次発掘調査による考察	7
第2節 第2次発掘調査の成果	21
第3節 小 結	22

第3章 その他の成果

第1節 古志遺跡群の大溝	(三原)	27
第2節 古志遺跡群の井戸	(三原)	32
第3節 搬入系遺物	(米田)	38

第4章 総 括 (三原)

写真図版

挿図目次

図1 下古志遺跡と周辺の遺跡(1:12,000) 1	図13 古志遺跡群 主要井戸実測図2(1:80) 35
図2 古志遺跡群内発掘調査地 位置図(1:5,000) 3・4	図14 出雲平野出土 須玖式土器(1:6) 38
図3 第1次発掘調査 遺構時期別分布図1(1:2,000) 13・14	図15 西部瀬戸内系複合口縁壺・北九州系壺出土分布図 (弥生時代後期～終末期) 38
図4 第1次発掘調査 遺構時期別分布図2(1:2,000) 15・16	図16 下古志遺跡出土 塩町式壺・鉢(1:6) 39
図5 第1次発掘調査 弥生土器変遷図(1:8) 20	図17 下古志遺跡D区 SD05出土 ポーリングビン形広口壺(1:8) 40
図6 下古志遺跡・田畑遺跡 遺構分布範囲概略図 23	図18 下古志遺跡出土 分銅形土製品(1:3) 41
図7 第2次発掘調査 遺構配置図(1:200) 24	図19 下古志遺跡B区 SII04 出土遺物(1:6) 42
図8 第1次発掘調査 遺構配置図(1:400) 25・26	図20 下古志遺跡B区 SD49・SI03・SK25 出土遺物(1:6) 43
図9 下古志遺跡・田畑遺跡 大溝断面図(1:100) 30	図21 吉備地域の布留式土器(1:8) 45
図10 下古志遺跡・田畑遺跡 大溝土軸分布模式図 30	図22 瓢形土器(1:3) 46
図11 下古志遺跡・田畑遺跡 大溝分布図(1:5,000) 31	
図12 古志遺跡群 主要井戸実測図1(1:80) 34	

表目次

表1 古志遺跡群 発掘調査一覧表 6	表7 下古志遺跡・田畑遺跡 大溝一覧表 31
表2 第1次発掘調査 遺構時期別一覧表1 10	表8 古志遺跡群 井戸時期別検出数 33
表3 第1次発掘調査 遺構消長表1 11	表9 古志遺跡群 井戸地下施設割合 33
表4 第1次発掘調査 遺構消長表2 12	表10 古志遺跡群 井戸地下施設時期別割合 34
表5 第1次発掘調査 遺構時期別一覧表2 18	表11 古志遺跡群 井戸一覧表1 36
表6 第1次発掘調査 主要遺構変遷表 19	表12 古志遺跡群 井戸一覧表2 37

写真図版目次

表紙カラー

- 左 上 下古志遺跡から古志本郷遺跡を望む
右 上 E区 SD04 環濠と考えられる大溝
左 下 G区 SE10 丸太刳抜き井戸側
右 下 下古志遺跡出土 分銅形土製品（一部）
図版1 古志遺跡群航空写真（上が北）
図版2-1 C区 SI01 横穴式住居跡
2 A区 SB04 掘立柱建物跡
3 B区 SB06 布堀り掘立柱建物跡

- 図版3-1 F区 SD01 断面V字形
2 D区 大溝断面W字形
3 E区 SD13 断面逆台形
図版4-1 B区 SK10 井戸祭祀跡
2 D区 SE04 木組井戸側・水溜
3 G区 SE09 石組井戸側
図版5-1 D区 SD05出土 須玖式土器
2 D区 大溝出土 塩町式土器
3 下古志遺跡出土 分銅形土製品（全部）

第1章 下古志遺跡と周辺の発掘調査

第1節 下古志遺跡の発掘調査

下古志遺跡は、出雲平野の南に迫る中国山脈から派生する丘陵の山麓付近に位置している。神戸川の左岸に占地しており、古志本郷遺跡、田畠遺跡などとともに古志遺跡群を形成する遺跡のひとつである。下古志遺跡は、発掘調査が実施される以前は、現在のように広範囲に及ぶ遺跡としては捉えられておらず、正蓮寺北遺跡、上組遺跡などが点在している箇所と考えられていた。しかし、9,000m²を超える第1次発掘調査の結果、点在すると思われていた遺跡が、ひとつの遺跡としてつながりをもつことが確認された。このため、第1次発掘調査中はまとめて正蓮寺周辺遺跡と仮称を付けていたが、調査が進むにつれて、現在の下古志町を中心とする遺跡であることが判明したため、平成11年（1999）に島根県教育委員会と出雲市教育委員会との協議の結果、「下古志遺跡」と命名した。

下古志遺跡では、これまでに2次にわたる発掘調査が実施されている。第1次発掘調査は平成7年度から平成9年度に実施された、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う発掘調査であり、第2次発掘調査は、これを受けた遺構の範囲確認調査である。これらの発掘調査成果について簡単に触れておく。

第1次発掘調査

第1次発掘調査¹⁾は、島根県出雲土木建築事務所が計画した、一般県道多伎江南出雲線改良工事の事前調査として、平成7年度（1995）から平成9年度（1997）の3年度にわたり、出雲市教育委員会によって実施された。この県道の工事範囲は全長760m×幅12mの9,120m²であった。一部がL字状に



図1 下古志遺跡と周辺の遺跡（1:12,000）

カーブする路線であるが、遺跡全域をほぼ横断する形状と規模のトレンチを設定することとなった。

発掘調査の結果、遺跡の範囲について、次の成果があった。まず、点在すると考えられていた上組遺跡、正蓮寺北遺跡、弘法寺參道付近遺跡が一連の遺跡である可能性が高いことが判明した。また、既に実施されていた田畠遺跡の第2次発掘調査成果とあわせて、北東に隣接する古志本郷遺跡との境に低地が延びていることが想定されたほか、もう一方の下古志遺跡の南西端も推測可能になった。

また、断続的ではあるものの、弥生時代中期後葉から近世以降に至る遺構や遺物が検出されたことから、長期間にわたる複合遺跡であることが判明した。特に、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の遺構と遺物が多数検出された。さらに、遺構の中には環濠と考えられる大溝のほか、豎穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑墓群なども認められた。これらは、当時の集落の様相を解明するうえで、欠くことのできない資料となっている。

古墳時代の遺構や遺物は僅かであったが、奈良・平安時代から中世のものは比較的多く発見されている。隣接する古志本郷遺跡では島根県教育委員会の発掘調査によって、奈良時代の郡庁と考えられる大型掘立柱建物跡などが検出されている。したがって、下古志遺跡の奈良時代頃の遺構や遺物は、神門郡衙周辺の資料として注目されている。

第2次発掘調査

第2次発掘調査²²⁾は、第1次発掘調査で検出された環濠と考えられる大溝の範囲確認を目的として、平成11年度（1999）に出雲市教育委員会によって、国庫・県費補助事業として実施された。

この発掘調査は、環濠と考えられる大溝延べ8条のうち、トレンチ設定地が確保できた3条についての範囲確認調査となった。3条の大溝の延長線を推定し、大溝が極端に屈曲せずに伸びれば、ほぼ確実に交差するラインに沿って、1T～3Tの3つのトレンチを設置し、発掘調査が実施された。この結果、すべてのトレンチで大溝が1条ずつ確認された。いずれも出土遺物の時期や断面形などの類似により、第1次発掘調査で検出された大溝の一部と考えられることから、環濠と考えられる大溝が当初の推定どおり伸びることが確認できたと同時に、環濠として築かれた可能性が高くなっている。

第2節 下古志遺跡周辺の発掘調査

古志遺跡群内では、下古志遺跡の2次にわたる発掘調査以外にも、古志本郷遺跡や田畠遺跡で多数の発掘調査が実施されている。古志遺跡群内で集中的に発掘調査が行われるきっかけとなったのは、国土交通省が進める斐伊川放水路建設事業であり、この事業を中核として県道や市道の改良工事も進められた。しかし、近年、連続して行われてきたこれらに関わる発掘調査も、平成13年度（2001）をもってすべて終了し、一応の区切りがつく。よって、既往の古志遺跡群内発掘調査を簡単に整理しておく。

古志本郷遺跡の発掘調査

古志本郷遺跡においては、現在までに、出雲市教育委員会や島根県教育委員会によって、13次に及ぶ発掘調査が実施されている。以下、概要について振り返ってみたい。

第1次発掘調査²³⁾は昭和62年度（1987）に出雲市教育委員会によって、古志地区遺跡分布調査の一環として実施されている。この調査は斐伊川・神戸川治水（斐伊川放水路建設）事業に伴う急速な開発を想定して、事前に遺跡の分布状況を把握すべく実施された発掘調査であり、あわせて現地踏査も

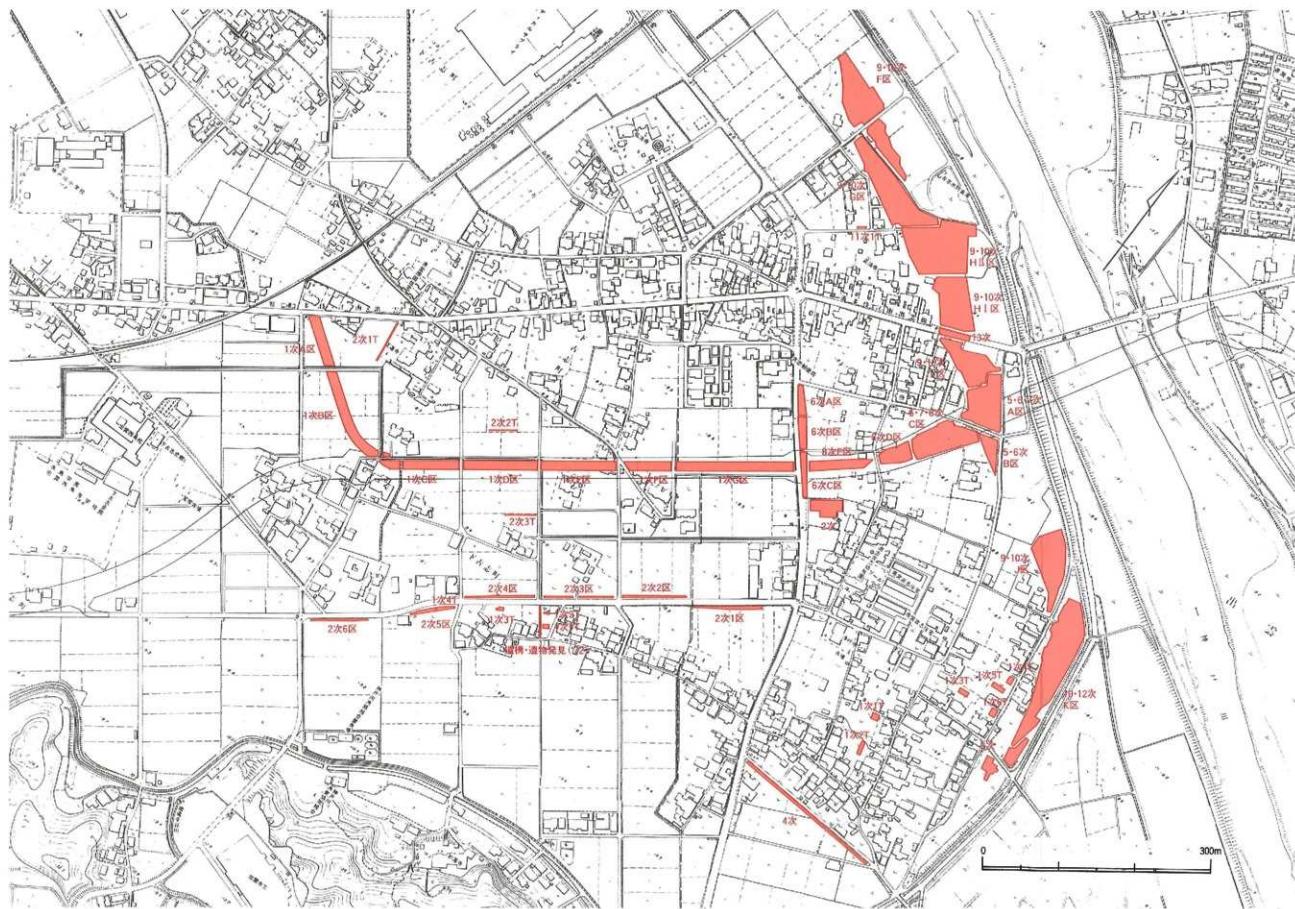


図2 古志遺群内発掘調査地位置図（1:5,000）

行われている。発掘調査では古志本郷遺跡内に6つのトレンチが設定された。主な調査成果として、それまで弥生時代後期以降とされていた古志本郷遺跡の時期が中期に遡った点、遺跡が広範囲に及ぶことが確認された点が挙げられる。これらの成果は、当時、古志本郷遺跡の重要性を再認識させるものとなった。

第2次発掘調査⁴⁾は平成2年度（1990）に出雲市教育委員会によって、古志公民館移転改築に伴い実施されている。主な調査成果としては、弥生時代中期後葉頃の堅穴住居跡が3基検出されたことが挙げられる。当時、堅穴住居跡が完掘されるのは、出雲市内で初めてであり、同時にグリーンタフ、青瑪瑙などのさまざまな石材が出土したことから、遺跡内で玉作が行われていた可能性が高いことが分かった。

第3次発掘調査⁵⁾は平成5年度（1993）に出雲市教育委員会によって、畠地造成に伴い実施されている。遺構や遺物の検出数が少ないため、調査箇所が遺跡範囲の端部であるとの推定に至っている。

第4次発掘調査⁶⁾は平成7年度（1995）に出雲市教育委員会によって、古志地区上地改良総合事業に伴い実施された。遺跡が占地する微高地の南東端に位置するため、検出された遺構や遺物は少なかった。奈良・平安時代を中心とする、弥生時代中期から近世に至る遺物が検出されている。

第5次⁷⁾・第7次⁷⁾・第8次⁷⁾・第9次^{9)~12)}・第10次^{9)~13)}・第12次^{12)~13)}・第13次発掘調査¹⁴⁾は、島根県教育委員会によって実施された、斐伊川放水路建設に伴う一連の発掘調査であり、期間も平成7年度（1995）から平成13年度（2001）までの長期にわたっている。調査面積も非常に大きく、遺跡の中央を横切るA区～E区、神戸川に臨み遺跡を縁取るF区～K区が設定されたことから、遺跡の全体像が明らかになりつつある。

主要な成果としては、まず、弥生時代前期の溝状遺構が検出されたことが挙げられる。局地的ではあるが、これまで中期後葉と考えられていた古志本郷遺跡の初現期が前期に遡った。次に、多数の堅穴住居跡や大溝、また、それらに伴う多量の遺物の検出によって、弥生時代の集落の様相が明らかになりつつある。また、奈良時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物跡などが検出されており、神門郡衙に関連するものである可能性が高いと考えられている。さらに、中世の遺構や遺物も多数検出されており、出雲古志氏の成立期における集落の様相を解明するうえで貴重な資料を追加しているほか、近世に至る土師質土器の編年表も示され、近隣遺跡で出土する土師質土器の指標となっている。

第6次発掘調査⁸⁾は平成7年度（1995）に出雲市教育委員会によって、市道本郷新宮線道路改良工事に伴い実施された。調査にあたっては、下古志遺跡に臨む遺跡の外縁付近にA区～C区の調査区が設定された。検出された大溝の出土遺物と既往の発掘調査成果から、古志本郷遺跡出土遺物の変遷がまとめられたほか、出雲平野における他の遺跡も視野に入れた動向についても考察がなされている。

第11次発掘調査⁹⁾は平成11年度（1999）に、先述の郡衙である可能性が指摘される大型掘立柱建物跡の範囲確認を目的として、出雲市教育委員会が国庫・県費補助を受けて実施した。その結果、建物の柱穴が存在すると想定された箇所で、柱穴が確認されたため、郡衙の推定規模を支持する成果をあげた。

田畠遺跡の発掘調査

田畠遺跡は、昭和47年（1972）に実施された神西神門地区田園整理工事に伴う幅2mの水路掘削の際に、遺構や遺物が確認されてその存在が明らかになって以来、これまでに2次の発掘調査が行われ

ている。

第1次発掘調査¹³⁾は昭和63年（1988）に出雲市教育委員会によって、神門地区遺跡詳細分布調査の一環として実施されている。この調査も、斐伊川・神戸川治水（斐伊川放水路建設）事業に関連する神門地区での急速な開発を想定して、予め遺跡の分布状況を把握すべく行われた調査であり、国庫補助事業として実施されている。遺跡内の4箇所に1T～4Tのトレーナーが設定され調査が行われた結果、1Tで環溝の可能性がある弥生時代中期の溝が検出されたほか、3Tからは同時期の堅穴住居跡も見つかり、玉作が行われていた可能性を示唆する黒曜石、瑪瑙なども出土した。また、その他の遺物には、土師器、須恵器、中世陶器などが認められることから、以前より長期にわたる集落造営が想定されるに至った。

第2次発掘調査¹⁴⁾は平成9年度（1997）から平成10年度（1998）に、市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う発掘調査として、出雲市教育委員会によって実施された。1区～6区の調査区が、遺跡範囲の中心軸である北東軸に沿って設けられたため、遺跡全体にトレーナーを入れる格好となった。調査の結果、遺跡の南西端と北東端が確認された。また、下古志遺跡の第1次発掘調査と類似する大溝が8条検出され、繋がりに間に心が向かれた。また、遺構に伴うものではないものの、弥生時代前期の遺物が出土し、付近の前期遺跡の存在を示唆した。さらに、中世の遺構や遺物が多数出土しており、古志遺跡群内における中世の様相を解明するうえでの資料を追加している。

遺跡名	調査次数	調査年度	調査区	調査原因	調査主体	参考文献
下古志遺跡	第1次	平成7年度～平成9年度	A区～G区	一般県道多伎江南出雲線改良	出雲市教委	1
	第2次	平成11年度（1999）	1T～3T	遺構範囲確認	出雲市教委	2
	第1次	昭和62年度（1987）	1T～6T	遺跡範囲確認	出雲市教委	3
	第2次	平成2年度（1990）	区分けなし	古志公民館移転改築	出雲市教委	4
	第3次	平成5年度（1993）	区分けなし	畠地造成	出雲市教委	5
	第4次	平成7年度（1995）	区分けなし	古志地区土地改良総合事業	出雲市教委	6
	第5次	平成7年度（1995）	A区・B区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	7
	第6次	平成7年度（1995）	A区～C区	市道不郷新宮線道路改良	出雲市教委	8
	第7次	平成8年度（1996）	A区・C区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	7
	第8次	平成9年度（1997）	C区～E区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	7
	第9次	平成10年度（1998）	F区～J区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	9～12
	第10次	平成11年度（1999）	F区～K区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	9～13
	第11次	平成11年度（1999）	1T	遺構範囲確認	山陰市教委	2
	第12次	平成12年度（2000）	K区	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	12・13
	第13次	平成13年度（2001）	区分けなし	斐伊川放水路建設	鳥取県教委	14
田畠遺跡	第1次	昭和63年度（1988）	1T～4T	遺跡範囲確認	出雲市教委	15
	第2次	平成9年度～平成10年度	1区～6区	市道浅柄古志線歩道設置	出雲市教委	16

表1 古志遺跡群 発掘調査一覧

註・参考文献

- 1) 出雲市教育委員会他 「下古志遺跡 一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001
- 2) 出雲市教育委員会 「下古志遺跡」 1平成11年度古志道路群開拓確認調査報告書」2002
- 3) 出雲市教育委員会 「古志地区遺跡分布調査報告書」1988
- 4) 出雲市教育委員会 「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第4集 1994
- 5) 出雲市教育委員会 「出雲市埋蔵文化財調査報告書」第5集 1995
- 6) 出雲市教育委員会 「古志地区「土地改良総合事業地」内「古志本郷遺跡」発掘調査報告書」1999
- 7) 鳥取県教育委員会他 「古志本郷遺跡Ⅰ 斐伊川放水路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書VI」1999
- 8) 出雲市教育委員会 「市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書」1998
- 9) 鳥取県教育委員会他 「古志本郷遺跡Ⅱ 斐伊川放水路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書XII」2001
- 10) 鳥取県教育委員会他 「古志本郷遺跡Ⅲ」 「斐伊川放水路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書XIII」2001
- 11) 鳥取県教育委員会 「鳥取県教育厅「文化財保護 埼玉県埋蔵文化財調査セミナー」年報第 平成10年度」1999
- 12) 鳥取県教育委員会 「鳥取県教育厅「埋蔵文化財調査セミナー」年報第 平成11年度」2000
- 13) 鳥取県教育委員会 「鳥取県教育厅「埋蔵文化財調査セミナー」年報第 平成12年度」2001
- 14) 鳥取県教育委員会 「古志本郷遺跡Ⅳ」 「斐伊川放水路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書14」2002
- 15) 出雲市教育委員会 「出雲細道・市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2000
- 16) 出雲市教育委員会 「出雲細道・市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2000

第2章 下古志遺跡の時期

第1節 第1次発掘調査成果による考察

下古志遺跡の第1次発掘調査では、弥生時代中期中葉から近世に至る土器や陶磁器などの遺物¹⁷⁾が、断続的に出土している。ここでは、これらを出土する遺構のうち、時期が判断できるものを抽出し、さらに、中核となる時期で区分することにより、各時期における遺構の密度や配置をもとに、集落の様相を考察してみたい。

弥生時代中期後葉

遺跡の初現期

下古志遺跡第1次発掘調査において、弥生時代前期以前の遺物は、遺構の内外を問わずまったく出土していない。最も古い遺物は、中期中葉の範疇に入ると考えられるものであり、D区SD05とE区SD13から出土している。しかし、この二つの遺構の出土遺物総数と比較すると、中期中葉の遺物はごくわずかな点数であり、中期後葉以降の遺物が圧倒的に多い。よって、現時点では、弥生時代中期中葉をもって遺跡の初現期とするには資料が乏しいため、中期後葉が下古志遺跡の初現期であると推測する。

主要な遺構

下古志遺跡において、まとまった数の遺構や遺物が確認できる最初の時期は、初現期である弥生時代中期後葉である。したがって、この時期をひとつの中核時期とした。

中期後葉の遺構は、遺物の時期から判断して、後期に入る前に消滅するものと、後期に入ってからも継続するものの二つに分類される。ここでは中期後葉に存在したと考えられるものを消滅、継続のいかんに関わらず取り上げることとする。

この時期の遺構の種類としては、住居跡、建物跡、井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構などが挙げられる。住居跡はC区のSI01のみである。これは堅穴式で、終末期頃に立て替えあるいは再建築が行われたようである。建物跡はB区のSB08、G区のSB04、SB05である。いずれも掘立柱式であるが、B区SB08は布掘りである。また、G区SB04・SB05はほぼ同規模で、2棟が長軸方向に並んで検出されているため、同時期頃の同じ性格を有する建物である可能性が高い。井戸跡としては、G区のSK02が1基だけ検出されているが、土坑である可能性も残るものである。土坑・ピットは検出数が多い。特筆すべきはD区南西端付近でまとまって検出された土坑・ピットであり、土坑墓群と考えられている。溝状遺構はD区のSD05、SD06、大溝、E区のSD04、SD05、SD07、SD13など、F区のSD01、G区のSD01、SD02、SD04などである。これらのうち、D区SD05・大溝、E区SD04・SD07・SD13、F区SD01は、その規模や断面形などから環濠の可能性が指摘できる。また、D区SD06は南西にある土坑墓群の墓域を区切る区画溝、G区SD01・SD02は排水溝、G区SD02は何らかの区画溝と想定されるものである。

遺構の分布

この時期の遺構は、C区の中央からG区の南西寄りまでの比較的狭い範囲に分布し、他の範囲では

まったくといっていいほど検出されないことを特徴としている。遺構の密度も高くはなく、最も古い中期中葉の遺物も、この範囲の遺構から出土している。これらのことから、遺跡内において最初に集落造営を行った集団は、この範囲への進出を足がかりにしたと考えられる。また、集団の規模は、後の中核期と比較し、大きくなかったと推測される。

集落の様相

この時期の遺構配置における特徴は、分布範囲中央のD区とE区に環濠の可能性がある溝が集中して築かれ、その南西側と北東側に他の遺構が配される点である。E区SE06やF区SK03など、E区SD13とF区SD01によって、つまり、溝と溝で仕切られる帶域に位置する遺構も認められるが、その数は少ない。遺構密度が高い南西側と北東側では、前者に土坑墓群やピットなどが認められ、後者には建物や排水溝など生活と密接する遺構が配されている。これらのことから、環濠と考えられる溝を境に、南西側に墓域、北東側に集落が配された構図が浮かび上がる。仮に環濠集落を想定するならば、北東側が環濠内の生活域、南西側は環濠外の墓域と考えられる。

しかし、環濠と考えられる溝はすべて後期に継続するが、中期後葉に出現したその他の遺構は、後期に入る前にその多くが姿を消している。このことから、環濠と考えられる溝は、後期集落のために構築されたものであり、その他の遺構とは僅かな時期差で共存していなかった可能性もある。この点は、C区SI01が墓域付近に設置されている不自然さからも指摘できる点である。

また、この時期は、遺構分布範囲における遺構密度は高いとはいえないため、他の中核時期と比較して、人口密度は低いと考えられる。

弥生時代後期

主要な遺構

弥生時代後期の遺物は出土量が多い。したがってこの時期の遺構の数も増える傾向にある。下古志遺跡の全時期を通してみても、重要な中核期といえよう。

この時期における主な遺構の種類は、住居跡、建物跡、井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構であり、中期後葉と比較し、住居跡、建物跡の出現数が増えるという特徴がある。住居跡はA区のSI01、SI02、SI03、SI04、B区のSI01、C区のSI02、D区のSI01、G区のSI01、SI02が列挙でき、いずれも竪穴式である。建物跡はA区のSB01、SB03、SB04、SB05、B区のSB01、SB03、SB04、SB05、SB06、G区のSB01である。すべて掘立柱式であるが、A区SB03、B区SB03・SB04・SB05・SB06は布掘りである。また、A区SB04はサイコロの5の目状に1m規模の大きな柱穴を配することから、高い建物が想定される。井戸跡はA区のSK28、C区のSE08の2基が検出されている。土坑・ピットはB区、D区、G区からあわせて4基が見つかったに過ぎず、中期後葉と比較し大幅に減る。環濠と考えられる溝については、A区の大溝、SD28がこの時期に出現すると同時に、中期後葉に姿を現したものも、すべてこの時期まで継続して存在している。その他の区画溝などは、検出数に大きな変化はない。また、中期後葉から後期に継続する遺構は溝状遺構以外ではほとんど認められない。

遺構の分布

弥生時代後期における遺構分布の特徴として、中期後葉では遺構がほとんど認められなかったA区、B区で多数の遺構が出現する点が挙げられる。また、中期後葉に遺構が分布しなかったG区中央より

北東の箇所でも遺構が新たに確認できるようになる点も指摘できる。これらの点から、この時期に集落の中心がA区、B区に移ったと同時に、集落範囲が調査区全域に拡張したと推定できる。

しかし、集落範囲は拡張するものの、中期後葉でその存在が認められたC区からD区南西端付近にかけての遺構が、この時期には姿を消している点も留意の必要があろう。

集落の様相

住居跡や建物跡など生活と密接する遺構は、A区とB区に高い密度で集中しており、集落の中心がこの範囲にあったことは間違いない。また、環濠と考えられるA区の大溝とSD28が、この時期に調査区西端付近に姿を現している。このうち、A区SD28の延長線はD区SD05のそれと調査区付近で交わることから、1条の溝として機能していた可能性が高い。仮に両者が繋がる1本の溝であるならば、A区とB区付近、つまり、生活域の中心が環濠によって囲繞される環濠集落の形態が認められるといえるであろう。

次に、A区のものを除く環濠と考えられる大溝の軸方向に着目して、この時期における集落の様相を推測したい。これら大溝の軸方向は大きく二つに分けられる。一つはD区SD05の方向であり、もう一つはE区SD07の方向である。前者はD区大溝、E区SD04が対応し、後者はE区SD13やF区SD01が対応する。前に述べたが、この時期にはG区で遺構の分布範囲の拡張が認められる時期である。また、G区の遺構には住居跡や建物跡など、生活に密接した遺構が認められている。これらのことから、先に想定した環濠集落とは別に、E区SD07からG区北東端に至る箇所で集落の存在が想定され、環濠を配していた可能性も指摘できよう。あくまで想像の域を出ないものであるが、この時期における集落の様相として、A区SD28とD区SD05などによって開繞されるA区、B区を中心とする集落と、E区SD07やF区SD01とG区北東端の帶状低地によって開繞されるG区を中心とする集落の二つの環濠集落を想定してみた。

弥生時代終末～古墳時代初頭

主要な遺構

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてを、ひとつの中核時期として割り当てた。弥生時代後期からこの時期に継続する遺構は少なく、新たに出現する遺構が多い。主要な遺構は住居跡、建物跡、井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構などである。住居跡はいずれも竪穴式であり、B区のSI03、SI04、C区のSI01が挙げられる。B区SI03・SI04はいずれも古墳時代初頭のものと考えられる。建物跡はA区のSB01、SB05、SB06、B区のSB02、SB07の5棟が認められる。井戸跡はB区のSK10、SK25、SK28であり、祭祀が行われたものも認められる。土坑・ピットや溝状遺構は、A区とB区で検出数が多くなっている。また、この時期の環濠と考えられる溝であるA区の大溝、SD28、D区のSD05、大溝、E区のSD07、SD13はすべて後期から継続するものであり、新たなものは出現していない。

分布の範囲

この時期の遺構分布の特徴は、E区のSD13より北東で遺構がまったく検出されなくなるという点である。また、遺構の密度が高いA区、B区の遺構の多くは後期から継続するものではなく、この時期に新たに出現している点も注目される。つまり、A区、B区では、古い遺構が姿を消すと同時に新しい遺構が築かれており、活発な集落造営がうかがえる。しかし、E区SD13より北東では、古い遺

構が姿を消した後に新たな遺構は築かれず無遺構地帯となっている。このことから、A区、B区はこの時期も集落の中心となるが、E区SD13より北東は集落範囲ではなくなつたと考えられる。

集落の様相

遺構の分布状況から、この時期は環濠集落の様相を呈していた可能性が高い。つまり、A区のSD28とD区のSD05によって囲繞される集落形態が、後期と比較しさらに際だつて浮かび上がっている。住居跡、建物跡、小規模な溝など生活に直接関わる遺構は、いずれも環濠の内部と想定される範囲に配置されている。また、後期には調査区全域に拡張した集落範囲が、この時期に入ってA区、B区付近にまとまる状況を勘案すると、集落が終焉に向かう何らかの緊張状態に入った可能性も指摘できる。実際、後の古墳時代の間は、遺構がほとんど検出されず、集落自体が一時姿を消している。また、この時期まで継続する環濠と考えられるA区大溝・SD28、D区SD05・大溝、E区SD07・SD13は、いずれもこの時期をもって消滅しており、F区SD01などは廃棄時に埋め戻され、埋土上に土器を並べた¹⁸可能性もうかがえる。この行為は、集落の終焉を迎えるにあたつて行った祭祀であるとも考えられる。

弥生時代中期後葉

住居	DK SD01~	DK SD02~	DK SD03~	DK SD04~	DK SD05~	DK SD06~	DK SD07~	DK SD08~	DK SD09~	DK SD10~	DK SD11~	DK SD12~	DK SD13~	DK SD14~	DK SD15~	DK SD16~	DK SD17~	DK SD18~	DK SD19~	DK SD20~	DK SD21~	DK SD22~	DK SD23~	DK SD24~	DK SD25~	DK SD26~	DK SD27~	DK SD28~	DK SD29~	DK SD30~	DK SD31~	DK SD32~	DK SD33~	DK SD34~	DK SD35~	DK SD36~	DK SD37~	DK SD38~	DK SD39~	DK SD40~	DK SD41~	DK SD42~	DK SD43~	DK SD44~	DK SD45~	DK SD46~	DK SD47~	DK SD48~	DK SD49~	DK SD50~	DK SD51~	DK SD52~	DK SD53~	DK SD54~	DK SD55~	DK SD56~	DK SD57~	DK SD58~	DK SD59~	DK SD60~	DK SD61~	DK SD62~	DK SD63~	DK SD64~	DK SD65~	DK SD66~	DK SD67~	DK SD68~	DK SD69~	DK SD70~	DK SD71~	DK SD72~	DK SD73~	DK SD74~	DK SD75~	DK SD76~	DK SD77~	DK SD78~	DK SD79~	DK SD80~	DK SD81~	DK SD82~	DK SD83~	DK SD84~	DK SD85~	DK SD86~	DK SD87~	DK SD88~	DK SD89~	DK SD90~	DK SD91~	DK SD92~	DK SD93~	DK SD94~	DK SD95~	DK SD96~	DK SD97~	DK SD98~	DK SD99~	DK SD100~	DK SD101~	DK SD102~	DK SD103~	DK SD104~	DK SD105~	DK SD106~	DK SD107~	DK SD108~	DK SD109~	DK SD110~	DK SD111~	DK SD112~	DK SD113~	DK SD114~	DK SD115~	DK SD116~	DK SD117~	DK SD118~	DK SD119~	DK SD120~	DK SD121~	DK SD122~	DK SD123~	DK SD124~	DK SD125~	DK SD126~	DK SD127~	DK SD128~	DK SD129~	DK SD130~	DK SD131~	DK SD132~	DK SD133~	DK SD134~	DK SD135~	DK SD136~	DK SD137~	DK SD138~	DK SD139~	DK SD140~	DK SD141~	DK SD142~	DK SD143~	DK SD144~	DK SD145~	DK SD146~	DK SD147~	DK SD148~	DK SD149~	DK SD150~	DK SD151~	DK SD152~	DK SD153~	DK SD154~	DK SD155~	DK SD156~	DK SD157~	DK SD158~	DK SD159~	DK SD160~	DK SD161~	DK SD162~	DK SD163~	DK SD164~	DK SD165~	DK SD166~	DK SD167~	DK SD168~	DK SD169~	DK SD170~	DK SD171~	DK SD172~	DK SD173~	DK SD174~	DK SD175~	DK SD176~	DK SD177~	DK SD178~	DK SD179~	DK SD180~	DK SD181~	DK SD182~	DK SD183~	DK SD184~	DK SD185~	DK SD186~	DK SD187~	DK SD188~	DK SD189~	DK SD190~	DK SD191~	DK SD192~	DK SD193~	DK SD194~	DK SD195~	DK SD196~	DK SD197~	DK SD198~	DK SD199~	DK SD200~	DK SD201~	DK SD202~	DK SD203~	DK SD204~	DK SD205~	DK SD206~	DK SD207~	DK SD208~	DK SD209~	DK SD210~	DK SD211~	DK SD212~	DK SD213~	DK SD214~	DK SD215~	DK SD216~	DK SD217~	DK SD218~	DK SD219~	DK SD220~	DK SD221~	DK SD222~	DK SD223~	DK SD224~	DK SD225~	DK SD226~	DK SD227~	DK SD228~	DK SD229~	DK SD230~	DK SD231~	DK SD232~	DK SD233~	DK SD234~	DK SD235~	DK SD236~	DK SD237~	DK SD238~	DK SD239~	DK SD240~	DK SD241~	DK SD242~	DK SD243~	DK SD244~	DK SD245~	DK SD246~	DK SD247~	DK SD248~	DK SD249~	DK SD250~	DK SD251~	DK SD252~	DK SD253~	DK SD254~	DK SD255~	DK SD256~	DK SD257~	DK SD258~	DK SD259~	DK SD260~	DK SD261~	DK SD262~	DK SD263~	DK SD264~	DK SD265~	DK SD266~	DK SD267~	DK SD268~	DK SD269~	DK SD270~	DK SD271~	DK SD272~	DK SD273~	DK SD274~	DK SD275~	DK SD276~	DK SD277~	DK SD278~	DK SD279~	DK SD280~	DK SD281~	DK SD282~	DK SD283~	DK SD284~	DK SD285~	DK SD286~	DK SD287~	DK SD288~	DK SD289~	DK SD290~	DK SD291~	DK SD292~	DK SD293~	DK SD294~	DK SD295~	DK SD296~	DK SD297~	DK SD298~	DK SD299~	DK SD300~	DK SD301~	DK SD302~	DK SD303~	DK SD304~	DK SD305~	DK SD306~	DK SD307~	DK SD308~	DK SD309~	DK SD310~	DK SD311~	DK SD312~	DK SD313~	DK SD314~	DK SD315~	DK SD316~	DK SD317~	DK SD318~	DK SD319~	DK SD320~	DK SD321~	DK SD322~	DK SD323~	DK SD324~	DK SD325~	DK SD326~	DK SD327~	DK SD328~	DK SD329~	DK SD330~	DK SD331~	DK SD332~	DK SD333~	DK SD334~	DK SD335~	DK SD336~	DK SD337~	DK SD338~	DK SD339~	DK SD340~	DK SD341~	DK SD342~	DK SD343~	DK SD344~	DK SD345~	DK SD346~	DK SD347~	DK SD348~	DK SD349~	DK SD350~	DK SD351~	DK SD352~	DK SD353~	DK SD354~	DK SD355~	DK SD356~	DK SD357~	DK SD358~	DK SD359~	DK SD360~	DK SD361~	DK SD362~	DK SD363~	DK SD364~	DK SD365~	DK SD366~	DK SD367~	DK SD368~	DK SD369~	DK SD370~	DK SD371~	DK SD372~	DK SD373~	DK SD374~	DK SD375~	DK SD376~	DK SD377~	DK SD378~	DK SD379~	DK SD380~	DK SD381~	DK SD382~	DK SD383~	DK SD384~	DK SD385~	DK SD386~	DK SD387~	DK SD388~	DK SD389~	DK SD390~	DK SD391~	DK SD392~	DK SD393~	DK SD394~	DK SD395~	DK SD396~	DK SD397~	DK SD398~	DK SD399~	DK SD400~	DK SD401~	DK SD402~	DK SD403~	DK SD404~	DK SD405~	DK SD406~	DK SD407~	DK SD408~	DK SD409~	DK SD410~	DK SD411~	DK SD412~	DK SD413~	DK SD414~	DK SD415~	DK SD416~	DK SD417~	DK SD418~	DK SD419~	DK SD420~	DK SD421~	DK SD422~	DK SD423~	DK SD424~	DK SD425~	DK SD426~	DK SD427~	DK SD428~	DK SD429~	DK SD430~	DK SD431~	DK SD432~	DK SD433~	DK SD434~	DK SD435~	DK SD436~	DK SD437~	DK SD438~	DK SD439~	DK SD440~	DK SD441~	DK SD442~	DK SD443~	DK SD444~	DK SD445~	DK SD446~	DK SD447~	DK SD448~	DK SD449~	DK SD450~	DK SD451~	DK SD452~	DK SD453~	DK SD454~	DK SD455~	DK SD456~	DK SD457~	DK SD458~	DK SD459~	DK SD460~	DK SD461~	DK SD462~	DK SD463~	DK SD464~	DK SD465~	DK SD466~	DK SD467~	DK SD468~	DK SD469~	DK SD470~	DK SD471~	DK SD472~	DK SD473~	DK SD474~	DK SD475~	DK SD476~	DK SD477~	DK SD478~	DK SD479~	DK SD480~	DK SD481~	DK SD482~	DK SD483~	DK SD484~	DK SD485~	DK SD486~	DK SD487~	DK SD488~	DK SD489~	DK SD490~	DK SD491~	DK SD492~	DK SD493~	DK SD494~	DK SD495~	DK SD496~	DK SD497~	DK SD498~	DK SD499~	DK SD500~	DK SD501~	DK SD502~	DK SD503~	DK SD504~	DK SD505~	DK SD506~	DK SD507~	DK SD508~	DK SD509~	DK SD510~	DK SD511~	DK SD512~	DK SD513~	DK SD514~	DK SD515~	DK SD516~	DK SD517~	DK SD518~	DK SD519~	DK SD520~	DK SD521~	DK SD522~	DK SD523~	DK SD524~	DK SD525~	DK SD526~	DK SD527~	DK SD528~	DK SD529~	DK SD530~	DK SD531~	DK SD532~	DK SD533~	DK SD534~	DK SD535~	DK SD536~	DK SD537~	DK SD538~	DK SD539~	DK SD540~	DK SD541~	DK SD542~	DK SD543~	DK SD544~	DK SD545~	DK SD546~	DK SD547~	DK SD548~	DK SD549~	DK SD550~	DK SD551~	DK SD552~	DK SD553~	DK SD554~	DK SD555~	DK SD556~	DK SD557~	DK SD558~	DK SD559~	DK SD560~	DK SD561~	DK SD562~	DK SD563~	DK SD564~	DK SD565~	DK SD566~	DK SD567~	DK SD568~	DK SD569~	DK SD570~	DK SD571~	DK SD572~	DK SD573~	DK SD574~	DK SD575~	DK SD576~	DK SD577~	DK SD578~	DK SD579~	DK SD580~	DK SD581~	DK SD582~	DK SD583~	DK SD584~	DK SD585~	DK SD586~	DK SD587~	DK SD588~	DK SD589~	DK SD590~	DK SD591~	DK SD592~	DK SD593~	DK SD594~	DK SD595~	DK SD596~	DK SD597~	DK SD598~	DK SD599~	DK SD600~	DK SD601~	DK SD602~	DK SD603~	DK SD604~	DK SD605~	DK SD606~	DK SD607~	DK SD608~	DK SD609~	DK SD610~	DK SD611~	DK SD612~	DK SD613~	DK SD614~	DK SD615~	DK SD616~	DK SD617~	DK SD618~	DK SD619~	DK SD620~	DK SD621~	DK SD622~	DK SD623~	DK SD624~	DK SD625~	DK SD626~	DK SD627~	DK SD628~	DK SD629~	DK SD630~	DK SD631~	DK SD632~	DK SD633~	DK SD634~	DK SD635~	DK SD636~	DK SD637~	DK SD638~	DK SD639~	DK SD640~	DK SD641~	DK SD642~	DK SD643~	DK SD644~	DK SD645~	DK SD646~	DK SD647~	DK SD648~	DK SD649~	DK SD650~	DK SD651~	DK SD652~	DK SD653~	DK SD654~	DK SD655~	DK SD656~	DK SD657~	DK SD658~	DK SD659~	DK SD660~	DK SD661~	DK SD662~	DK SD663~	DK SD664~	DK SD665~	DK SD666~	DK SD667~	DK SD668~	DK SD669~	DK SD670~	DK SD671~	DK SD672~	DK SD673~	DK SD674~	DK SD675~	DK SD676~	DK SD677~	DK SD678~	DK SD679~	DK SD680~	DK SD681~	DK SD682~	DK SD683~	DK SD684~	DK SD685~	DK SD686~	DK SD687~	DK SD688~	DK SD689~	DK SD690~	DK SD691~	DK SD692~	DK SD693~	DK SD694~	DK SD695~	DK SD696~	DK SD697~	DK SD698~	DK SD699~	DK SD700~	DK SD701~	DK SD702~	DK SD703~	DK SD704~	DK SD705~	DK SD706~	DK SD707~	DK SD708~	DK SD709~	DK SD710~	DK SD711~	DK SD712~	DK SD713~	DK SD714~	DK SD715~	DK SD716~	DK SD717~	DK SD718~	DK SD719~	DK SD720~	DK SD721~	DK SD722~	DK SD723~	DK SD724~	DK SD725~	DK SD726~	DK SD727~	DK SD728~	DK SD729~	DK SD730~	DK SD731~	DK SD732~	DK SD733~	DK SD734~	DK SD735~	DK SD736~	DK SD737~	DK SD738~	DK SD739~	DK SD740~	DK SD741~	DK SD742~	DK SD743~	DK SD744~	DK SD745~	DK SD746~	DK SD747~	DK SD748~	DK SD749~	DK SD750~	DK SD751~	DK SD752~	DK SD753~	DK SD754~	DK SD755~	DK SD756~	DK SD757~	DK SD758~	DK SD759~	DK SD760~	DK SD761~	DK SD762~	DK SD763~	DK SD764~	DK SD765~	DK SD766~	DK SD767~	DK SD768~	DK SD769~	DK SD770~	DK SD771~	DK SD772~	DK SD773~	DK SD774~	DK SD775~	DK SD776~	DK SD777~	DK SD778~	DK SD779~	DK SD780~	DK SD781~	DK SD782~	DK SD783~	DK SD784~	DK SD785~	DK SD786~	DK SD787~	DK SD788~	DK SD789~	DK SD790~	DK SD791~	DK SD792~	DK SD793~	DK SD794~	DK SD795~	DK SD796~	DK SD797~	DK SD798~	DK SD799~	DK SD800~	DK SD801~	DK SD802~	DK SD803~	DK SD804~	DK SD805~	DK SD806~	DK SD807~	DK SD808~	DK SD809~	DK SD810~	DK SD811~	DK SD812~	DK SD813~	DK SD814~	DK SD815~	DK SD816~	DK SD817~	DK SD818~	DK SD819~	DK SD820~	DK SD821~	DK SD822~	DK SD823~	DK SD824~	DK SD825~	DK SD826~	DK SD827~	DK SD828~	DK SD829~	DK SD830~	DK SD831~	DK SD832~	DK SD833~	DK SD834~	DK SD835~	DK SD836~	DK SD837~	DK SD838~	DK SD839~	DK SD840~	DK SD841~	DK SD842~	DK SD843~	DK SD844~	DK SD845~	DK SD846~	DK SD847~	DK SD848~	DK SD849~	DK SD850~	DK SD851~	DK SD852~	DK SD853~	DK SD854~	DK SD855~	DK SD856~	DK SD857~	DK SD858~	DK SD859~	DK SD860~	DK SD861~	DK SD862~	DK SD863~	DK SD864~	DK SD865~	DK SD866~	DK SD867~	DK SD868~	DK SD869~	DK SD870~	DK SD871~	DK SD872~	DK SD873~	DK SD874~	DK SD875~	DK SD876~	DK SD877~	DK SD878~	DK SD879~	DK SD880~	DK SD881~	DK SD882~	DK SD883~	DK SD884~	DK SD885~	DK SD886~	DK SD887~	DK SD888~	DK SD889~	DK SD890~	DK SD891~	DK SD892~	DK SD893~	DK SD894~	DK SD895~	DK SD896~	DK SD897~	DK SD898~	DK SD899~	DK SD900~	DK SD901~	DK SD902~	DK SD903~	DK SD904~	DK SD905~	DK SD906~	DK SD907~	DK SD908~	DK SD909~	DK SD910~	DK SD911~	DK SD912~	DK SD9

区	種類	遺構名	松本Ⅲ	松本Ⅳ	草田1	草田2	草田3	草田4	草田5	草田6	草田7
A	住居	SI01									
		SI02									
		SI03									
		SI04									
B	建物	SB01									
		SB03									
		SB04									
		SB05									
		SB06									
		SK28									
C	溝	SK31									
		大溝									
		SD10									
		SD11									
		SD12									
		SD13									
		SD17									
		SD28									
		SA04									
		SI01									
D	建物	SI03									
		SI04									
		SB01									
		SB02									
		SB03									
		SB04									
		SB05									
		SB06									
		SB07									
		SB08									
E	井戸	SK10									
		SK25									
		SK28									
		SK05									
F	土坑	SK11									
		SK16									
		SK27									
		SK39									
		SK45									
		SD09									
		SD10									
		SD18									
		SD19									
		SD22									
G	溝	SD24									
		SD26									
		SD27									
		SD28									
		SD40									
		SD43									
		SD47									
		SD49									
		SD50									
		SD53									
H	その他	SD56									
		土器群1									
I	住居	SI01									
		SI02									
J	井戸	SE08									
		SK09									
K	土坑	SK18									
		SK19									
		SK32									
L	溝	SD45									

表3 第1次発掘調査遺構消長表1

区	種類	遺構名	松本Ⅲ	松本Ⅳ	草田1	草田2	草田3	草田4	草田5	草田6	草田7
D	住居	SI01									
		SK01									
		SK02									
		SK03									
		SK04									
		SK06									
	土坑	SK07									
		SK08									
		SK10									
		SK13									
E	ビット	P0709									
	溝	SD05									
		SD06									
		大溝									
	土坑	SE06									
F	土坑	SK19									
		SD04									
		SD05									
		SD07									
		SD14									
		SD13									
	溝	SD15									
		SD16									
		SD17									
		SD19									
G		SD1a									
		SD1b									
	土坑	SK03									
		SK04									
		SK16									
		P0701									
	ビット	P1118									
		P1130									
		P1141									
		P1301									
		P1701									
H	溝	SD01									
	住居	SI01									
		SI02									
		SB01									
	建物	SB04									
		SB05									
	井戸	SK02									
		SK03									
	土坑	SK04									
		P2649									
I	ビット	P2521									
		P2744									
		SD01									
		SD02									
	溝	SD04									
J		SD07									
		SD28									

* 遺構内における土器の相対量を示し、遺構の消長を表している。

■認められる ■やや認められる □ほとんど認められない・認められない

表4 第1次発掘調査遺構消長表2

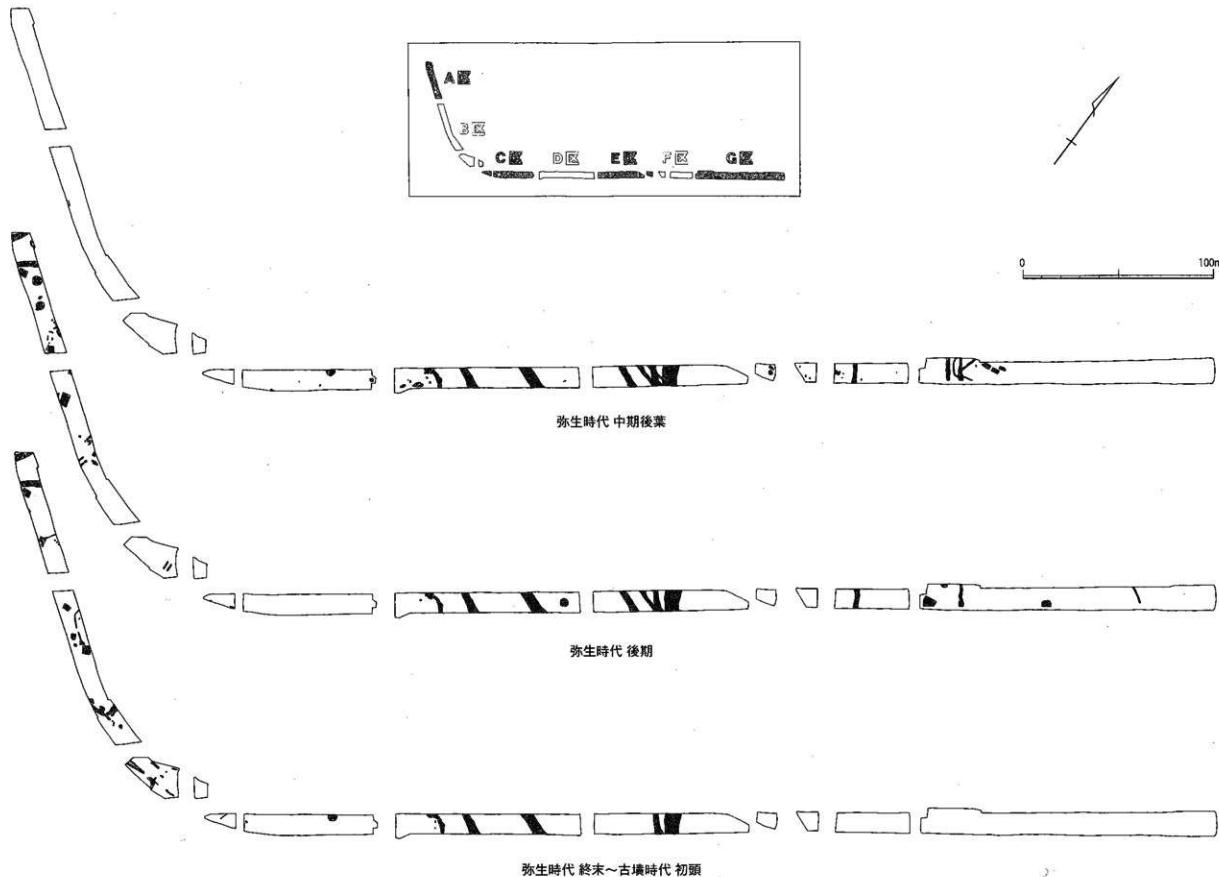


図3 第1次発掘調査遺構時期別分布図1 (1:2,000)

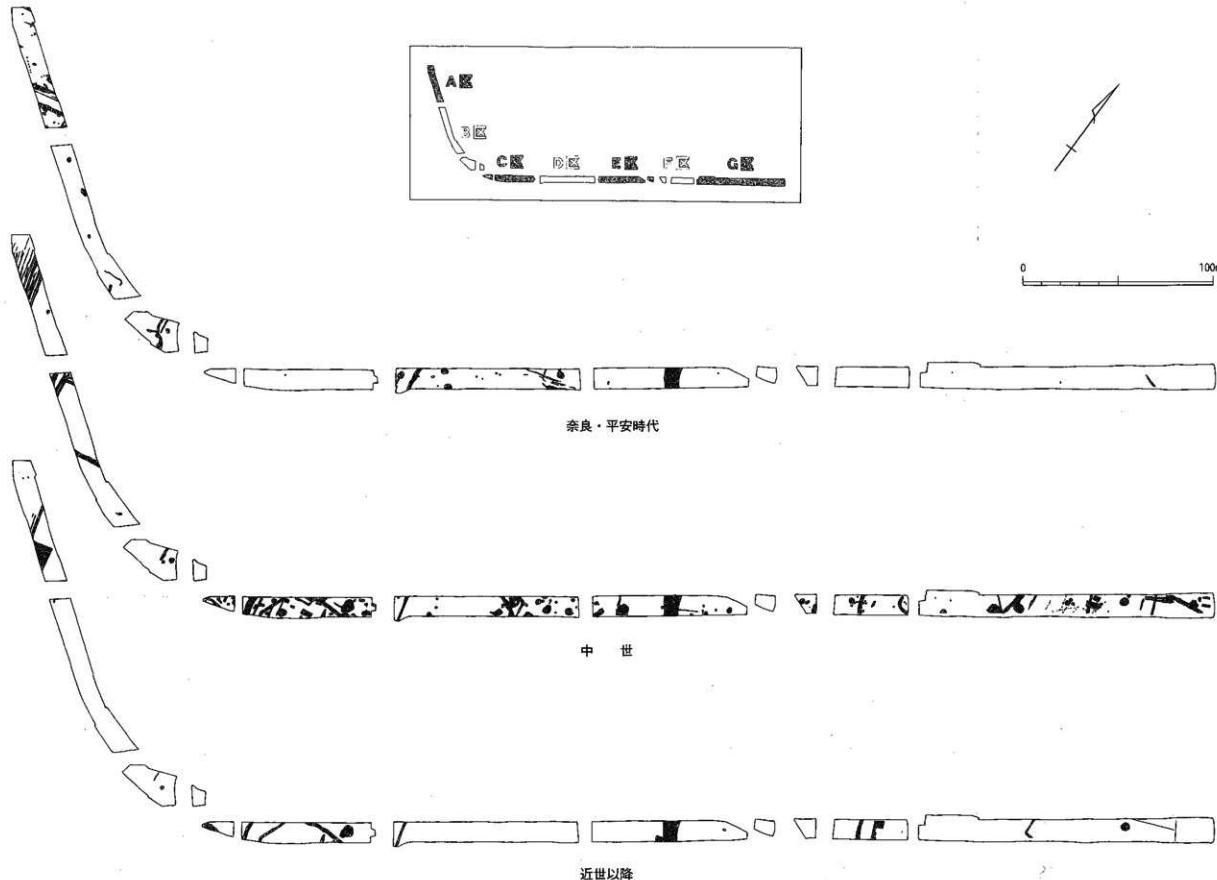


図4 第1次発掘調査遺構時期別分布図2 (1:2,000)

奈良・平安時代

初頭を除く古墳時代の遺構は、G区のSE03などが認められるに過ぎず、その数は極端に少ない。ある程度まとまった数の遺構が確認される時期は、奈良・平安時代に入つてからである。

この時期の重要な遺構は、A区、B区、D区で比較的多く認められ、南西半分の調査区に分布が偏っている様子がうかがえる。また、遺構の種類としては建物跡、井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構、柵列跡が挙げられる。建物跡はB区のSB02が唯一のものであり、この建物とピットを共有して柵列のSA02が検出されている。井戸跡はA区、B区、D区で検出されている。井戸側は素掘りを中心だが、水溜には丸太削抜き、曲物などが用いられているものもある。土坑・ピットはA区で密度が高く、D区でもやや多く検出されている。また、溝状遺構はA区、B区、D区で多い。特にA区のSD01～SD04は同時期ごろに機能していたと考えられ、方位規格にあつてある点が興味深い。また、住居跡が見つかっていないことから、竪穴式から平地式へその形態を変えたことがうかがえる。さらに、遺構が少ない箇所は農耕地としての利用が考えられる。

隣接する古志本郷遺跡では、奈良時代の郡衙に關係すると考えられる大型掘立柱建物が見つかっている。よつて、下占志遺跡はその周辺の遺跡として注目されている。

中世

中世は、遺構の数が全中核期を通してもっと多くなる時期である。時間が長いという点を差し引いても、遺構の密度は小さいとはいえない。遺構は全調査区に分布し、A区とB区を除く調査区では密度も高いことから、C区からG区辺りが生活の中心の場として、長期にわたり利用されていたことは間違いない。主な遺構の種類は建物跡、井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構、柵列などである。建物跡はC区、D区、G区で確認されている。C区のSB01とSB02は、SD01、SD08、SD21を付近に配した建物とも考えられる。また、D区からはSB01、G区からはSB02、SB03、SB06、SB08が検出されている。G区SB08は庇のあるしっかりとした建物が想定され柵も配していたようである。これをはじめとする建物跡のうちのいくつかは、住居として利用されていたと考えられる。井戸跡はA区を除く全区で検出されており、その数も多い。井戸側は素掘りが主流だが、木製のものや石組のものも見受けられる。溝状遺構もA区を除く全区で確認されている。大きなものは少なく、排水溝に利用されたと考えられる小さなのが多い。その他の遺構としてA区の畦状遺構が挙げられる。これは畑の存在を示唆するものであろう。また、D区のSK59やE区のSK09は、鉄滓など鍛冶に關係する遺物を出土していることから、集落内の大鍛冶の存在を示唆している。

近世以降

近世以降の遺構の分布は、全調査区に及ぶが密度は低い。主要な遺構の種類は井戸跡、土坑・ピット、溝状遺構などが挙げられる。井戸跡はB区、C区、G区で確認されているが、中世から継続すると思われるものも認められる。土坑・ピットはA区、C区、E区で検出されているが、その数は少ない。また、溝状遺構も広く分布するが、C区のSD08とSD21は繋がり1条となり、C区のSD01とともに館を取り囲む堀と考えられている。さらに、A区の東端付近やG区の北東端付近では水田跡も認められた。後者には、区画する杭列も認められ、水田面には牛の足跡も検出されている。

調査区付近は近世以降のある時期に、現在のように田園や畠という耕作地として利用されていた可能性が高い。そのため、多くの遺構は削平されていると考えられ、これが、遺構数が少ない原因であろう。また、居住域の中心は現在と変わらない箇所に移ったと考えられる。

奈良・平安時代																															
住居																															
建物	A区 SB02		B区								C区																				
井戸	A区			B区			C区			D区			E区			F区															
十块	SK01	SK02	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK08	SK09	SK10	SK11	SK12	SK13	SK14	SK15	SK16	SK17	SK18													
ピット	SK01	SK02	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK08	SK09	SK10	SK11	SK12	SK13	SK14	SK15	SK16	SK17	SK18													
溝	SD01	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD07	SD08	SD09	SD10	SD11	SD12	SD13	SD14	SD15	SD16	SD17	SD18													
その他	A区 SA01		B区 SA02		C区		D区		E区		F区		G区		H区		I区														
中世																															
住居																															
建物	A区 SB01		B区 SB02		C区 SB03		D区 SB04		E区 SB05		F区 SB06		G区 SB07		H区 SB08		I区 SB09														
井戸	A区			B区			C区			D区			E区			F区															
十块	SE02	SE03	SE04	SE05	SE06	SE07	SE08	SE09	SE10	SE11	SE12	SE13	SE14	SE15	SE16	SE17	SE18	SE19													
ピット	SE03	SE04	SE05	SE06	SE07	SE08	SE09	SE10	SE11	SE12	SE13	SE14	SE15	SE16	SE17	SE18	SE19	SE20													
溝	SD01	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD07	SD08	SD09	SD10	SD11	SD12	SD13	SD14	SD15	SD16	SD17	SD18													
その他	A区 SA01		B区 SA02		C区		D区		E区		F区		G区		H区		I区														
近世以降																															
住居																															
建物	A区 SD01		B区 SD02		C区 SD03		D区 SD04		E区 SD05		F区 SD06		G区 SD07		H区 SD08		I区 SD09														
井戸	A区			B区			C区			D区			E区			F区															
土塁・ピット	SK29	SK30	SK31	SK32	SK33	SK34	SK35	SK36	SK37	SK38	SK39	SK40	SK41	SK42	SK43	SK44	SK45	SK46													
溝	SD13	SD14	SD15	SD16	SD17	SD18	SD19	SD20	SD21	SD22	SD23	SD24	SD25	SD26	SD27	SD28	SD29	SD30													
その他	A区 SA01		B区 SA02		C区 SA03		D区 SA04		E区 SA05		F区 SA06		G区 SA07		H区 SA08		I区 SA09														
表5 第1次発掘調査遺構時期別一覧表2																															
住居																															
建物	A区 SD01		B区 SD02		C区 SD03		D区 SD04		E区 SD05		F区 SD06		G区 SD07		H区 SD08		I区 SD09														
井戸	A区			B区			C区			D区			E区			F区															
土塁・ピット	SK23	SK24	SK25	SK26	SK27	SK28	SK29	SK30	SK31	SK32	SK33	SK34	SK35	SK36	SK37	SK38	SK39	SK40													
溝	SD13	SD14	SD15	SD16	SD17	SD18	SD19	SD20	SD21	SD22	SD23	SD24	SD25	SD26	SD27	SD28	SD29	SD30													
その他	A区 SA01		B区 SA02		C区 SA03		D区 SA04		E区 SA05		F区 SA06		G区 SA07		H区 SA08		I区 SA09														

弥生土器の変遷

下古志遺跡第1次発掘調査における遺構内出土土器は、既存の松本編年¹⁹⁾と草田編年²⁰⁾に照らし合わせると、松本IV-2様式から草田7様式にかかるまでのものが迷縫と認められる。

このような状況下で、先述の弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の時期区分は、遺構の切り合い関係からではなく、遺構の出土土器を両編年と照合するというような、演繹的な手法を用いて時期設定を行っている。

よって、複数の様式の土器を出土する遺構においては、明らかに混入品と認められる土器以外は、それを遺構が機能していた時期を示すものと見なしている。このため、遺構は長期にわたり機能していたと解釈し、中核時期を一時期に絞るという所作は行っていない。

しかし、ここでは下古志遺跡第1次発掘調査で出土した、弥生土器の変遷を概観することを目的とした。したがって、ここで取り上げる資料は、土坑など機能していた期間が比較的短いと想定されるものの中から、比較的土器の出土量が多く一括性が高い遺構の土器を主に抽出した。

なぜなら、複数の様式の土器を出土する遺構を用いて変遷を追うと、結果的に出土土器を両編年にしたがって並べるだけの、あまり意味のない行為になってしまふが、上記の土器を用いれば、これが避けられると考えたからである。

もっとも、これらを先の編年にしたがって並べる行為は、遺構の切り合い関係に基づかない以上、演繹的であるに違はない。しかし、多少なりとも本来用いられるべき帰納的手段を加えることができ、変遷を追う上では好ましいと思われる。

この結果、やはり松本IV-2様式から草田7様式にかかるまでの、概ね各様式に対応する土器を出土する遺構が認められたため、これを表6に示し、変遷を図5にまとめた。

なお、この図5の作成にあたっては、表6に示した遺構から出土する資料を軸に据えてはいるが、資料が少なく、かえって変遷がつかみにくい場合や、希少な搬入系土器が認められる場合は、他の遺構のものであっても、臨機応変に示すよう努めている。

		弥生時代					古墳時代	
		後期			終末		初頭	前期
中期後葉	後葉	草田1	草田2	草田3	草田4	草田5	草田6	草田7
松本IV-1	松本IV-2							
D区SK63								
C区SK32								
G区SK03								
A区SK28								
B区SK05								
C区SI02								
A区SI02								
B区SD47								
B区SK10								
B区SI04								
B区SK25								

表6 第1次発掘調査主要遺構変遷表

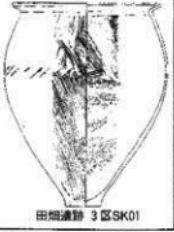
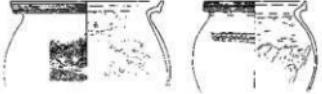
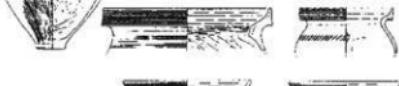
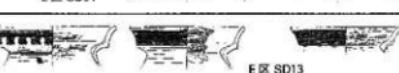
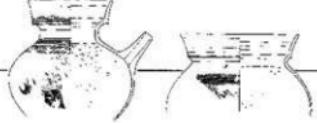
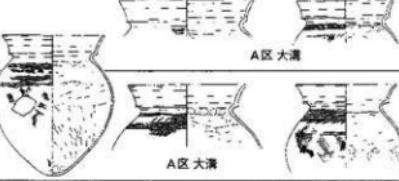
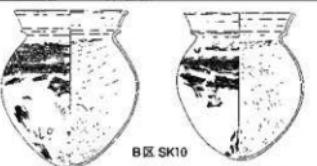
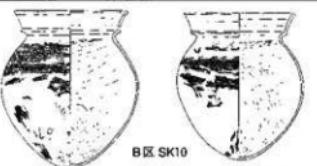
	主要遺構	その他の遺構	松本Ⅲ 参考資料
松本Ⅲ		 D区 SD05	 田畠遺跡 3区 SK01
松本Ⅳ-1	 C区 SK32	 F区 SD01	
松本Ⅳ-2	 G区 SK03	須玖式土器  D区 SD05	分銅形土製品  塙町式土器  D区 大溝
草田1	 A区 SK28	 F区 SD01	
草田2	 B区 SK05 C区 SI02	 E区 SD04	
草田3	 A区 SI02	 E区 SD13	
草田4	 B区 SD47	 A区 大溝	
草田5	 B区 SK10	 A区 SD28	 A区 大溝
草田6	 B区 SK10	 A区 SD28	 B区 SI04
草田7		 B区 土器群1	

図5 第1次発掘調査弥生土器変遷図（1:8）

第2節 第2次発掘調査の成果

下古志遺跡第2次発掘調査における成果の概要について、ここで若干触れておきたい。第2次発掘調査は第1次発掘調査で検出された環濠と考えられる大溝の延長を確認することを目的とし、平成11年度に出雲市教育委員会が、国庫・県費補助を受けて実施した。なお、同調査で古志本郷遺跡の郡庁²¹⁾延長範囲を目的にしたトレンチ調査も同時に実施しているが、ここでは下古志遺跡に設置した1Tから3Tの3トレンチについてのみ報告の対象とする。

トレンチ設定地は、現在、田や畑のため耕作の都合もあり、すべての大溝を対象として確保できた訳ではないが、A区のSD28(b)、D区のSD05(c)、大溝(d)の延長が確認できると考えられる箇所にトレンチ設定地が確保できたため、これらを中心に確認することとなった。調査の結果、1TのSD02(i)、2Tの大溝(j)、3Tの大溝(k)の延べ3条の大溝が検出されている。以下、遺構名のあとに()内の記号を用いてトレンチごとに調査結果を説明する。

1Tの調査結果

1Tはbの北東方向への延長を確認するために設定されたトレンチである。bから約80mの距離を隔て、想定延長線に交わるよう南北方向に長さ60mのものが設定され調査が実施された。この結果、トレンチ中央付近からiが検出された。このiは位置が近いことや、特徴において類似点が多いことから、bと繋がると考えられた。また、底の標高に着目し iからbに向かって下がる勾配が確認されている。

なお、その他の遺構としては、奈良・平安時代の溝状遺構や柱穴列などが確認されている。

2Tの調査結果

2Tはcとdの北西方向への延長を確認するために設定されたトレンチである。両者から約30mの距離を隔て、D区と平行する方向に長さ37mのものが設定された。調査の結果、トレンチ中央でjが検出された。このjは位置関係と、断面形がW字形であるという特異な共通点、そして、覆土が類似するという点から、dとの繋がりが推定されている。

なお、その他の遺構では、奈良・平安時代の溝状遺構、中世の井戸跡や窪地などが検出されている。

3Tの調査結果

3Tはcとdの南東方向への延長を確認するために設定されたトレンチである。両者から約60mの距離を隔てた箇所に、D区と平行する方向に長さ40mのものが設定された。調査の結果、トレンチの北東端付近でkが検出されている。このkについては、cとの規格の類似が指摘されながらも、覆土や断面形に解釈を加えての類似点から、dとの繋がりが想定されるに至っている。

なお、その他の遺構では、奈良・平安時代から中世の溝状遺構や性格不明遺構が検出されている。

繋がりの想定

以上の調査結果から、調査員によってE区のSD04(e)、SD13(g)、F区のSD01(h)も視野に入れたうえで、大溝の様相が想定されているので、ここで紹介したい。簡単に要約すると、いずれの大溝も環濠と考えた場合、b・cが内濠、hが外濠、a・d・e・gが間帯濠と捉えることができる。さらに、b-i-cが繋がり1条の内濠を形成し、a-j-d-kが繋がり1条の間帯濠となる可能性を秘めている、との想定となり、下古志遺跡で検出された大溝すべてを概観した一案が示された形となっている。

第3節 小 結

下古志遺跡と田畠遺跡の間に、遺跡を分断する要素は、現在のところ確認されていない。ここでは下古志遺跡と田畠遺跡を一つの遺跡と捉え、両遺跡の発掘調査成果を元に、遺構の分布範囲や密度の違いから、各時期の集落配置を推測したい。

弥生時代中期中葉

下古志遺跡で弥生時代前期の遺物は出土していないが、田畠遺跡では数点認められる。これは、付近に前期遺跡が存在する可能性を示唆する資料とはなり得るが、両遺跡の初現期を示すものではない。また、中期中葉の遺物は両遺跡から認められるが、下古志遺跡ではごく僅かな点数しか認められない。一方、田畠遺跡では、密度は低いが1区から5区の範囲で遺構も検出されている。よって、この範囲が両遺跡を通じて中心地であったと推定され、遺構分布範囲は舌状に延びる自然堤防上と思われる。

弥生時代中期後葉

下古志遺跡と田畠遺跡における遺構の分布状況から、この時期は集落の中心が田畠遺跡から下古志遺跡に移ったと想定できる。また、遺構の分布範囲もさらに広がりを見せると考えられる。両遺跡の大溝の多くはこの頃削除され始める。田畠遺跡が占地する自然堤防に沿って築かれ、その軸方向が下古志遺跡においても踏襲された可能性も考えられる²²⁾。

弥生時代後期

田畠遺跡の南東に及んでいたと考えられる遺跡範囲は、集落の中心が下古志遺跡のA区からB区にかけての範囲に移動したことによって、この時期で断たれたと思われる。また、田畠遺跡から下古志遺跡におよぶ集落は、おそらく大溝によって囲繞されていたと思われる。

弥生時代終末～古墳時代初頭

集落の中心は後期と変わらないが、遺構の分布範囲は下古志遺跡のE区中央と田畠遺跡の2区北東端を結んだ線より南に限定される。これは田畠遺跡が占地する自然堤防の地の利を生かしたものであつたろうと思われる。

奈良・平安時代

地の利は田畠遺跡の自然堤防の南境では生かされつつも、北では踏襲されなくなるようである。集落の中心は下古志遺跡のA区からD区の広範囲に及ぶと考えられる。また、その他の範囲では、農耕地として利用された可能性もある。

中世

中世の間には下古志遺跡と田畠遺跡の両者と古志本郷遺跡を分断する帶状の低地は埋まつたと考えられる。集落の中心は下古志遺跡のC区からG区、さらに田畠遺跡の1区と2区の範囲に及ぶが、帶状低地の埋没によって、三者で遺跡の隔たりがなくなつた可能性もある。

近世以降

中世で拡張を見せた集落範囲は、基本的に近世でも踏襲されたと思われる。しかし、近世から現代に至る間で、現在のような集落と農耕地の配置に転換されたと思われる。よって、近世以降については、現在の状況を当てはめることとし、概略図は省略する。

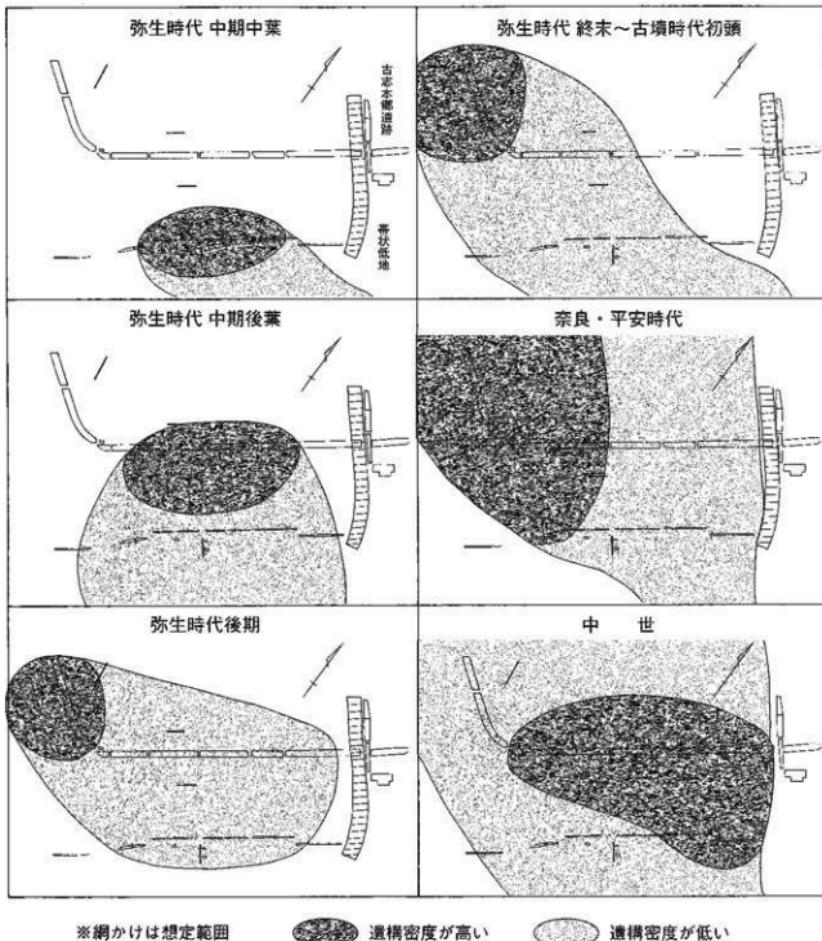


図6 下古志遺跡・田畠遺跡分布範囲概略図

註・参考文献

- 17) 7)・19)・20) 及び次の文献や検討会・研修資料を参考にした。
 - 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 一大東式の再検討ー」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会1991
 - 広江耕史「鳥取県における中世土器」『松江考古』第8集 松江考古学講話会 1992
 - 大谷晃一「出雲地域の染色器の誕生年と地城色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994
 - 中世土器研究会「概説 中世の上器・構成器」芦原社 1995
 - 松山智弘「小谷式再検討 - 出雲平野における新資料からー」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 2000
 - 山口平野の中世土器検討会・島根県埋蔵文化財調査センター専門研修
- 18)・19) 参照。古志本郷遺跡長区の大溝で顕著に認められる。
- 20) 松本岩雄「7出雲・陰岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社 1992
- 21) 参照。古志木郷遺跡G区のSB11、SB12が都合)と想定されている。
- 22) 木暮のp29「大溝の性格」参照。

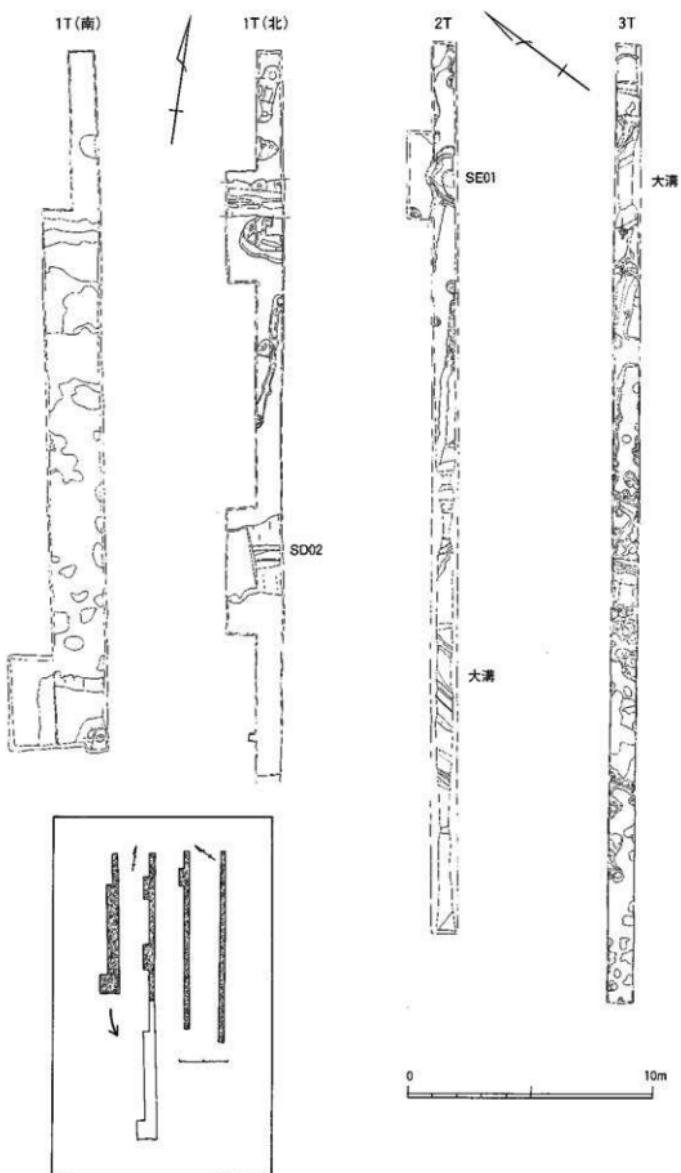


図7 第2次発掘調査遺構配置図 (1:200)

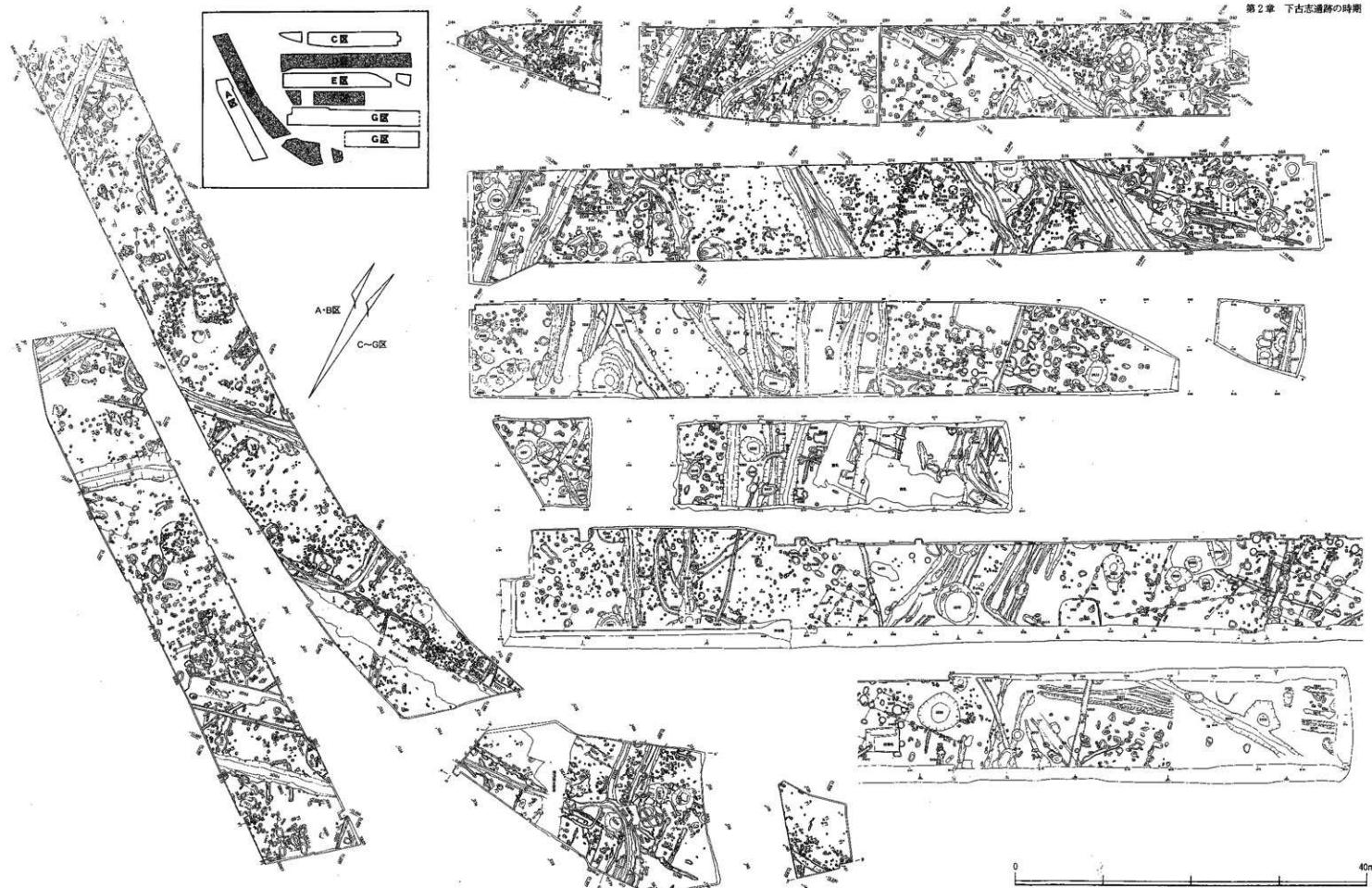


図8 第1次発掘調査遺構配置図 (1:400)

0 40m

第3章 その他の成果

第1節 古志遺跡群の大溝

古志遺跡群では近年の発掘調査において、環濠の可能性が指摘される大溝が、下古志遺跡、田畠遺跡、古志本郷遺跡で多数検出されている。これらのうち、下古志遺跡と田畠遺跡から検出されたものについて、その繋がりや性格などについて案を示してみたい。

下古志遺跡の大溝

下古志遺跡の第1次発掘調査では、環濠の可能性が指摘される大溝が8条検出されている。これらを列挙すると、A区の大溝(a)、SD28(b)、D区のSD05(c)、大溝(d)、E区のSD04(e)、SD07(f)、SD13(g)、F区のSD01(h)である。また、第2次発掘調査でも1TのSD02(i)、2Tの大溝(j)、3Tの大溝(k)の3条が検出されていることから、下古志遺跡での検出数は延べ11条となっている。

田畠遺跡の大溝

田畠遺跡においては、第1次発掘調査の1Tから溝I(l)が確認され、古志遺跡群内で初めて環濠である可能性が指摘された。また、第2次発掘調査では2区のSD02(m)、SD06(n)、SD07(o)、3区のSD01(p)、SD03(q)、SD04(r)、SD07(s)、6区のSD10(t)の8条が検出されていることから、田畠遺跡での検出数は延べ9条である。

大溝の特徴

ここでは検出地点、検出規模、断面形、軸方向、出土遺物の時期などに着目し、大溝の特徴を捉えてみたい。なお、以下の説明においては、便宜上、上記遺構名のあとに()内に示した記号を用いることとする。

まず、検出地に着目すると、これら大溝が集中して検出される範囲は、下古志遺跡においては、D区中央からF区中央までの範囲であり、田畠遺跡では2区と3区の範囲となっている。このような両遺跡の検出範囲から、幅200mに及ぶ大溝が集中する帯域が認められる。

次に、軸方向に注目したい。各大溝の軸方向は、大きくA群～D群の4群に分けられる。A群はa・b・lが構成し、N-32°-EからN-55°-Eに収まる。B群はi・n・o・p・q・rであり、N-70°-EからN-85°-Eに収まる。続いて、C群にはf・g・h・jが認められ、N-33°-WからN-44°-Wに収まり、D群はc・d・e・k・m・s・tで、N-59°-WからN-72°-Wに収まる。

続いて、検出規模と断面形について着目したい。検出規模は上幅1.7mから7m以上に至るまでのものが認められるが、3m前後のものが多い。また、深さについては0.7mから1.4mとなっており、1m前後に集中している。なお、断面形については、断面形はW字形、V字形、U字形、逆台形の4種に大別した。

大溝の繋がり

以上の特徴をよりどころとして、大溝の繋がりについて、その可能性が高いと思われる順に第1案から第4案を示す。なお、この想定にあたっては、大溝が途切れないこと、横端に曲がらないことを前提としている。また、ここで示すものはあくまで案であることを、誤解を招かぬよう申し添えておく。

第1案：b-i-c-k の繋がり

下古志遺跡第1次発掘調査当初は、b-c の繋がりが想定されていた。b と c の延長線が調査区付近で交わると同時に、検出規模や断面形が類似している点に起因する想定であった。しかし、直線距離で約300mの距離を隔てており、繋がるとの判断までには至らなかった。第2次発掘調査では、この繋がりの確認を目的として1Tが設定された。この結果、b の延長線付近で特徴が共通あるいは類似する i が検出された。したがって、b-i の繋がりはほぼ確定なものとなっている。

次に、i-c の繋がりについて述べる。i と c は特徴がよく類似するのであるが、両者をもっとも結びつけるのは、軸の延長線が調査区付近で交わることである。i と c の間にあたる第1次発掘調査区では、両者に対応しそうな大溝は見つかっていないため、これらが繋がらないとすると、互いに軸を北に振って遠ざかることを想定しなくてはならない。A区、B区で弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が存在することを勘案すると、この想定はかえって不自然であることから、繋がる可能性が高いと言える。

統いて、c-k の繋がりについて考える。k は3Tの北東端付近で検出されたものであり、これと繋がるもの候補としては、位置関係から c と d が挙げられる。これらのうち、k と特徴において共通点が多いのは c であり、c-k の繋がりが想定できる。仮に、d-k の繋がりを想定すると、c は軸方向を東に大きく振らなければならない。また、南に若干軸を振れば3Tにはかかるないのであるが、その場合は、田畠遺跡の4区で検出できるはずである。よって、ここでは c-k の繋がりを想定した。

k 以降の繋がりについては想定しかねるが、位置関係に重点をおき、候補として p を挙げておく。p は推定幅が7m以上であり、規模が一致しない。しかし、p の断面には切り合いが認められ、k と同等規模の溝が観察できる。よって、k-p の繋がりも候補として挙げられよう。

第2案：j-d-(n+o) の繋がり

ここでは、j-d-(n+o) の繋がりを想定する。これらは断面形がW字形であることに着目したものである。j-d は検出位置も近く、その特徴において共通事項も多いため、可能性が非常に高いといえよう。

d-(n+o) は距離が離れているが、第1案を内濠と考えた場合、外濠が想定できるため示した。また、n と o を同一の溝と考えればW字形となり、特異な形態のため繋がることを想定した。

なお、第1次発掘調査時には、b-c と同様に、ともに断面がW字形の a-d の繋がりも想定されていたが、現段階では検出規模と出土遺物の時期において、類似が認められるものの、距離が離れていることと同時に、軸延長線の交点が調査区からかなり遠くなることを考慮して案から外した。

第3案：m-h の繋がり

この案の根拠は m と h の位置関係と断面形、出土遺物の時期である。もうひとつは、中期後葉から後期の集落が両者より北東に認められるためである。また、この案は下古志遺跡と田畠遺跡の両遺跡と古志本郷遺跡の間に伸びる帶状低地との組み合わせを想定している。つまり、m-h の北東に中期後葉から後期にかけての遺構が認められるが、これらを m-h と帶状低地で囲繞していたという想定である。この場合、軸方向の類似から m-h が内濠、f や g が外濠を形成していた可能性も浮上していく。

$m-h$ の繋がりと同様に $m-e$ の繋がりも考えられる。 e はかなりしっかりとした溝である。 $m-h$ の繋がりと比較すると、 m と e はやや距離を隔てるため、 $m-h$ の可能性よりも低いと考えられる。しかし、候補としては残しておきたい。

第4案：g-p の繋がり

g と p はともに上幅が 7m 以上を測る大規模な溝である。軸方向で相違が認められるが、 p は溝の両肩が検出されたものではなく、南の肩のみの検出であり、北の肩は調査区外に及んでおり詳細不明である。そのため、軸方向は検出できた南の肩で計測したが、ここにはちょうど切り合いの関係にある古い溝が認められた。したがって、 p で示した軸方向はこの古い溝の軸方向となり、新しい規模の大きな溝のものではない。この新しい大規模な溝の軸方向は g のそれに近くなる可能性は残るが、離れる可能性は低い。近くなると仮定すると、 g と p は位置も近く他に規模や断面形が似るものもないため、 $g-p$ の繋がりを想定するのが自然となる。

その他の大溝

以上、大溝の繋りについて、案を示せるものを示した。その他のものは、繋がりについては言及できないが、重要と考えられるものもあるので、それらについて述べたい。

a は断面形 W 字形を呈し、上幅 5.1m を測るものである。 b の近くに配置されており、出土遺物の時期も共通することから、これと対をなす可能性もある。

s は検出規模は小さいものの、断面形は整った V 字形を呈していた。北側には 1.4m の間隔をおいてほぼ平行する小規模な溝も認められるなど、 e と類似する点も多い。

t は田畠遺跡の南西境にある。これより南西では徐々に地山の標高が下がり、遺構が認められない。 t の延長線上には道路があり、これは北に位置する遺跡境と考えられる。田畠遺跡と下古志遺跡が同一の大集落となれば、遺跡境に配される溝として、 t は重要な意味を持つ。

大溝の性格

これらの大溝は、先に示した案のように繋がれば、環濠として機能していた可能性は高いと考えられる。下古志遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の間は集落がひとかたまりにまとまり、周囲に大溝を配する構図が想定される²³⁾ ことから、何らかの緊張状態を見いだすことができる。これ以降、埋めた大溝上に土器を並べるという祭祀的な行為を経て、集落が衰退することを勘案すると、この時期には集落防衛の意図があったと思われる。しかし、弥生時代中期後葉から後期にかけては、大溝が環濠であっても、これを集落防衛のために築いたとは考えにくい。なぜなら、これらの大溝や周辺からは、武器など争いを示す遺物は出土しておらず、また、大溝の内外で遺構が認められるなど、緊張状態が想定しにくい²⁴⁾ からである。この時期には、環濠集落の形態だけが取り入れられたという印象を受ける。防御的意味合いは薄いが、集落を区画するための意思表示、あるいは、排水などを目的として築かれたと思われる。

次に、下古志遺跡と田畠遺跡の大溝の軸方向について触れておく。下古志遺跡の大溝は a と b を除くと軸方向が B 群、C 群、D 群に属し、田畠遺跡のものは I を除くと B 群、D 群に入っている。このように、両遺跡の大溝は軸方向が類似しているのだが、これは田畠遺跡の占地する微高地の自然地形を反映したことと考えられる。つまり、古志本郷遺跡の北端から田畠遺跡の中央にかけては、現在でも家屋が立ち並ぶ帶域があり、この下に舌状に延びる微高地の存在を示唆している。これと田畠遺

跡検出の大溝の位置を重ね合わせると、大溝の多くがこの微高地に沿って築かれている様子が観察できる。一方、下古志遺跡では、調査区の範囲では極端な地山の起伏は認められておらず、平坦な土地に大溝が掘削されており、そこに大溝を配する必然性が見いだせない。また、弥生時代中期中葉から中期後葉にかけて、田畠遺跡から下古志遺跡に集落の中心が移動することを勘案すると、下古志遺跡の大溝の軸方向は、田畠遺跡のそれを踏襲したと推測できる。

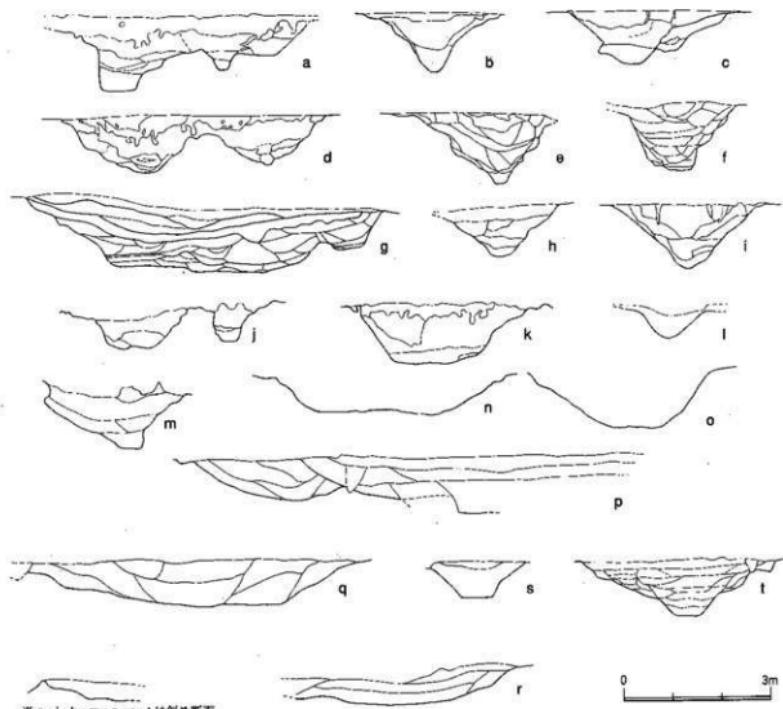


図9 下古志遺跡・田畠遺跡大溝断面図(1:100)

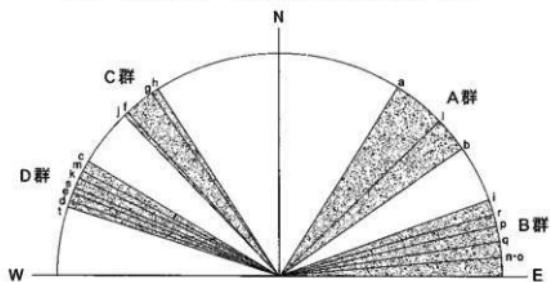


図10 下古志遺跡・田畠遺跡大溝主軸分布模式図

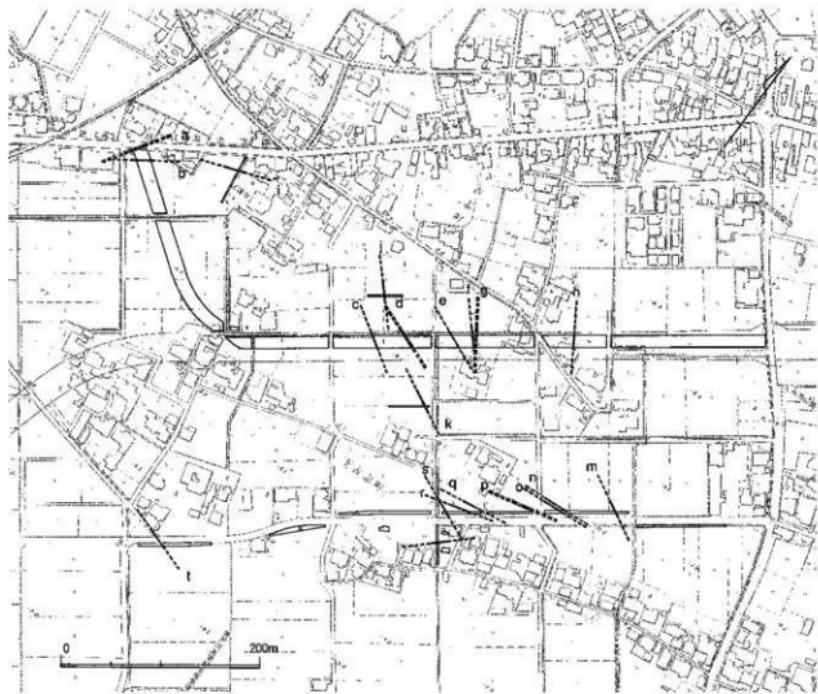


図11 下古志遺跡・田畠遺跡大溝分布図 (1:5,000)

遺跡名	調査次数	検出区	遺構名	検出規模 上幅×深さ(単位:m)	断面形	軸方向	時期	記号名	備考
下古志遺跡	第1次	A区	大溝	5.1×1.3	W字形	N-32°-E	草田1～草田6	a	
	第1次	A区	SD28	2.5×1.2	V字形	N-55°-E	草田1～草田6	b	
	第1次	D区	SD05	3.2×1.2	U字形	N-59°-W	松本Ⅲ-2～草田2	c	新旧有り
	第1次	D区	大溝	5.4×1.2	W字形	N-70°-W	松本Ⅳ-1～草田15	d	
	第1次	E区	SD04	3.3×1.4	V字形	N-68°-W	松本Ⅳ-1～草田3	e	
	第1次	E区	SD07	3.0×1.4	U字形	N-43°-W	松本Ⅳ-2～草田5	f	
	第1次	E区	SD13	7.2×1.4	逆台形	N-35°-W	松本Ⅲ-2～草田7	g	新旧有り
	第1次	F区	SD01	2.3×1.1	V字形	N-33°-W	松本Ⅳ-1～草田2	h	
	第2次	1T	SD02	2.9×1.3	V字形	N-70°-E	松本Ⅳ-2～草田6	i	
	第2次	2T (SD04-05)		3.7×0.8	W字形	N-44°-W	松本Ⅳ-2～草田6	j	
田畠遺跡	第2次	3T	大溝	3.3×1.2	逆台形	N-64°-W	松本Ⅲ-2～松本Ⅳ-2	k	
	第1次	1T	溝Ⅰ	1.7×0.7	U字形	N-46°-E	松本Ⅳ	l	
	第2次	2区	SD02	3.3(推定)×1.3	V字形	N-62°-W	松本Ⅳ-1～草田2	m	
	第2次	2区	SD06	4.3(推定)×1.1	U字形	N-85°-E	松本Ⅳ～草田7	n	
	第2次	2区	SD07	4.3(推定)×1.2	U字形	N-85°-E	松本Ⅳ-1～草田7	o	
	第2次	3区	SD01	7.0以上(推定)×1.1	逆台形?	N-77°-E	松本Ⅲ-2～草田11	p	新旧有り
	第2次	3区	SD03	3.0(推定)×0.9	逆台形	N-81°-E	松本Ⅲ-2～松本Ⅳ-1	q	
	第2次	3区	SD04	3.4(推定)×0.8	W字形	N-74°-E	松本Ⅲ-2～草田6	r	新旧有り
	第2次	3区	SD07	2.0×0.8	V字形	N-67°-W	松本Ⅲ-2～松本Ⅳ	s	
	第2次	6区	SD10	3.3(推定)×1.2	V字形	N-72°-W	松本Ⅳ-1～草田7	t	

表7 下古志遺跡・田畠遺跡大溝一覧表

第2節 古志遺跡群の井戸

古志遺跡群内では、近年の下古志遺跡、古志本郷遺跡、田畠遺跡の各発掘調査において、多数の井戸跡が検出されている。ここでは、報告書が発刊されているもの³³⁾を中心に時期別にまとめ、特徴を捉えることによって、遺跡群内における井戸の変遷を辿る手がかりとしたい。

井戸の分類

現在、古志遺跡群内の井戸跡は、その可能性があるものを含めて下古志遺跡で62基、古志本郷遺跡で75基、田畠遺跡で2基の合計139基が報告されている。これらについて、以下のとおり分類を行った。

まず、井戸の部分名称であるが、ここでは地上の施設を井桁、地下壁面の施設を井戸側、底の施設を水溜とした³⁴⁾。次に、各井戸跡の出土遺物から時期を推定し振り分けた。この際、調査員によって時期が示されているものは、それを優先することとした。さらに、各報告書に掲載されている井戸跡実測図から井戸側、水溜の分類³⁵⁾を行い、井戸側が素掘りまたは石組の場合は形状を、木製の場合は組み方や支持方法まで細分を行った。なお、浅い井戸跡などで、施設を井戸側と捉えるか水溜にするか判断に困る場合があったが、この場合は、一つの施設であっても井戸側と水溜の両方の性格を兼ね備えていると見なし、同一の分類形をそれぞれに当てはめることとした。

各時期の井戸

このように分類を行った結果、各時代の井戸の概要は次のとおりとなった。

弥生時代の井戸跡は4基を数え、全体の3%を占める。井戸側と水溜はいずれも素掘りであり、井戸側の形状は円筒形とすり鉢形が認められる。

古墳時代のものは6基で全体の4%である。井戸側と水溜はいずれも素掘りであり、井戸側の形状は円筒形とすり鉢形が認められる。また、下古志遺跡B区のSK10やSK25では、土器の出土状況から、井戸廃棄時に祭祀が行われた可能性が高い。さらに、SK10では井戸内に階段状のステップが、下古志遺跡G区のSE03では地表施設に関連する可能性がある2基のピットが検出されている。

奈良・平安時代のものは20基検出されており、全体の14%である。この時期になると井戸側、水溜とも素掘りのもののほか、木製施設を設置するものが認められるようになる。井戸側と水溜に木製施設を設置するものと、井戸側は素掘りで水溜だけに木製施設を設置するものの2種類が存在する。前者は下古志遺跡D区のSE04であり、井戸側が縦板組無支持、水溜が横板組で構成されている。後者は下古志遺跡B区のSE01やD区のSE07などが挙げられる。SE01は丸太を半分にして削り抜き、縦板を組み合わせたものを、SE07は曲物を水溜に用いている。

中世の井戸跡は73基検出されており、全体の53%と過半数を占めている。井戸側と水溜のそれぞれで素掘り、木製、石組が認められ、種類が豊富である。木製施設に着目すると、井戸側では丸太削抜き、縦板組、横板組が認められ、支持方法では縦板組で横桟どめ、隅柱横桟どめ、擁どめがあり、横板組では無支持と隅柱どめが確認されている。また、水溜では丸太削抜き、縦板組、横板組、横板組+縦板組、曲物が認められる。

井戸側と水溜の組み合わせもバラエティーに富む。素掘りの井戸側に木製の水溜を組み合わせる下古志遺跡D区のSE13、E区のSK18、G区のSK25、古志本郷遺跡A区のSE02、石組の井戸側に木製の水溜を組み合わせる下古志遺跡G区のSE09、古志本郷遺跡J区のSE02がその例として挙げられる。

近世の井戸跡は14基で、10%を占めている。井戸側、水溜とともに素掘り、木製、石組の施設が認

められる。木製施設に着目すると、井戸側では縦板組と横板組が、水溜では縦板組、横板組、横板組＋丸太刳抜きが確認されている。

近代の井戸跡も1基、1%検出されている。井戸側、水溜とも円筒形の縦板組で保持は擴どめのいわゆる桶側井戸である。なお、時期不明なものが21基、15%存在することを付け加えておく。

まとめ

古志遺跡群内の井戸は、弥生時代、古墳時代のものは少ない。また、両時代とも井戸側、水溜ともに素掘りのものしか認められない。しかし、奈良・平安時代には数が増す傾向にあり、井戸側と水溜の両方で木製のものが設置されるようになる。これらには、丸太刳抜き、板組、曲物が認められる。そして、中世に入ると井戸の数は飛躍的に増え、井戸側と水溜で素掘り、木製のほかに石組が用いられるはじめる。また、木製施設で丸太刳抜き、板組、曲物など多種が用いられる同時に、井戸側と水溜の組み合わせが異種素材で行われる場合も認められるため、井戸の種類がバラエティーに富む傾向にある。近世には数が極端に減少する。井戸側と水溜にはやはり、素掘り、木製、石組が認められるのであるが、木製施設に着目すると、曲物を設置するものが姿を消す。なお、近代では需要がほとんどなくなったためか、井戸は姿を消しつつある。

また、弥生時代から近世にかけては、井戸側または水溜において、素掘りの割合が次第に低くなっていく傾向が認められる。反対に、木製と石組が増加し、近世に至ると、木製が約半分を占め、次いで素掘り、石組の順の割合となる。

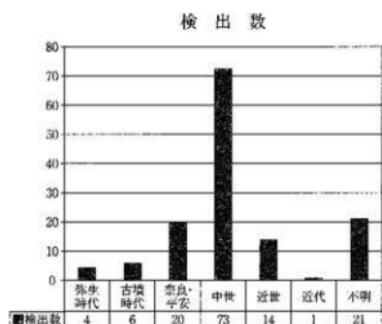


表8 古志遺跡群井戸時期別検出数

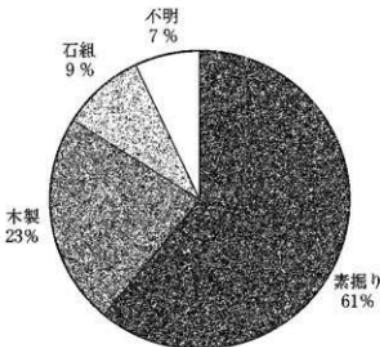


表9 古志遺跡群井戸地下施設割合

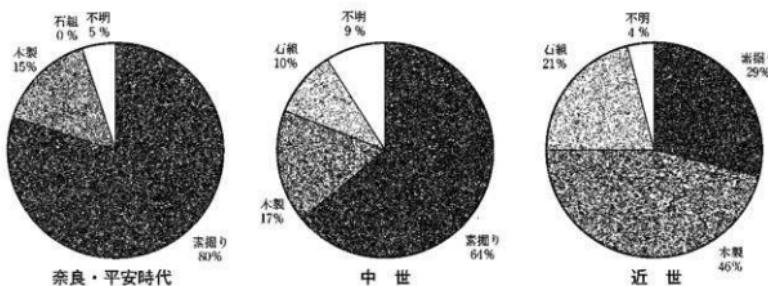


表10 古志遺跡群井戸地下施設時期別割合

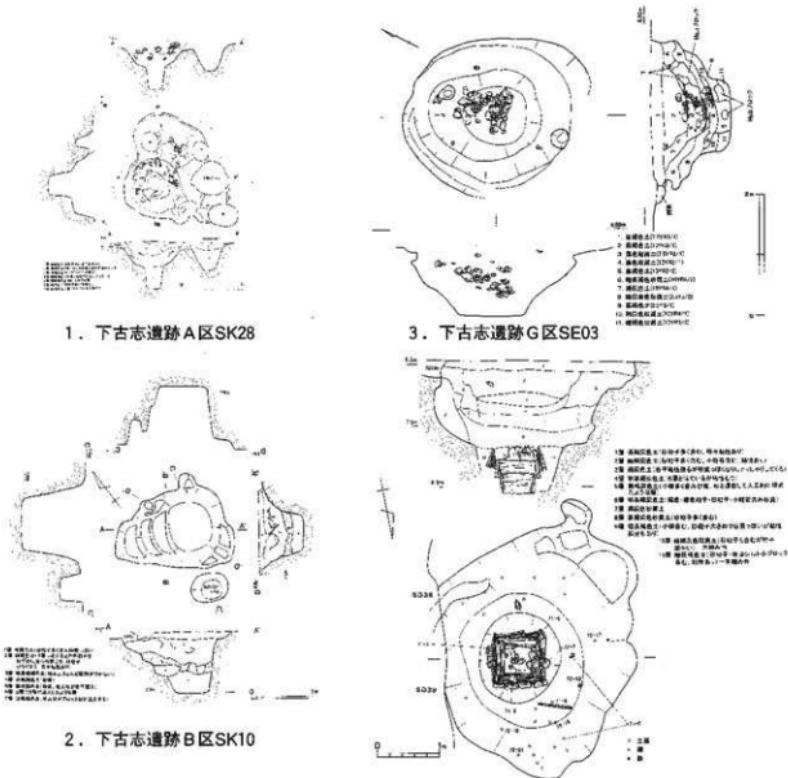
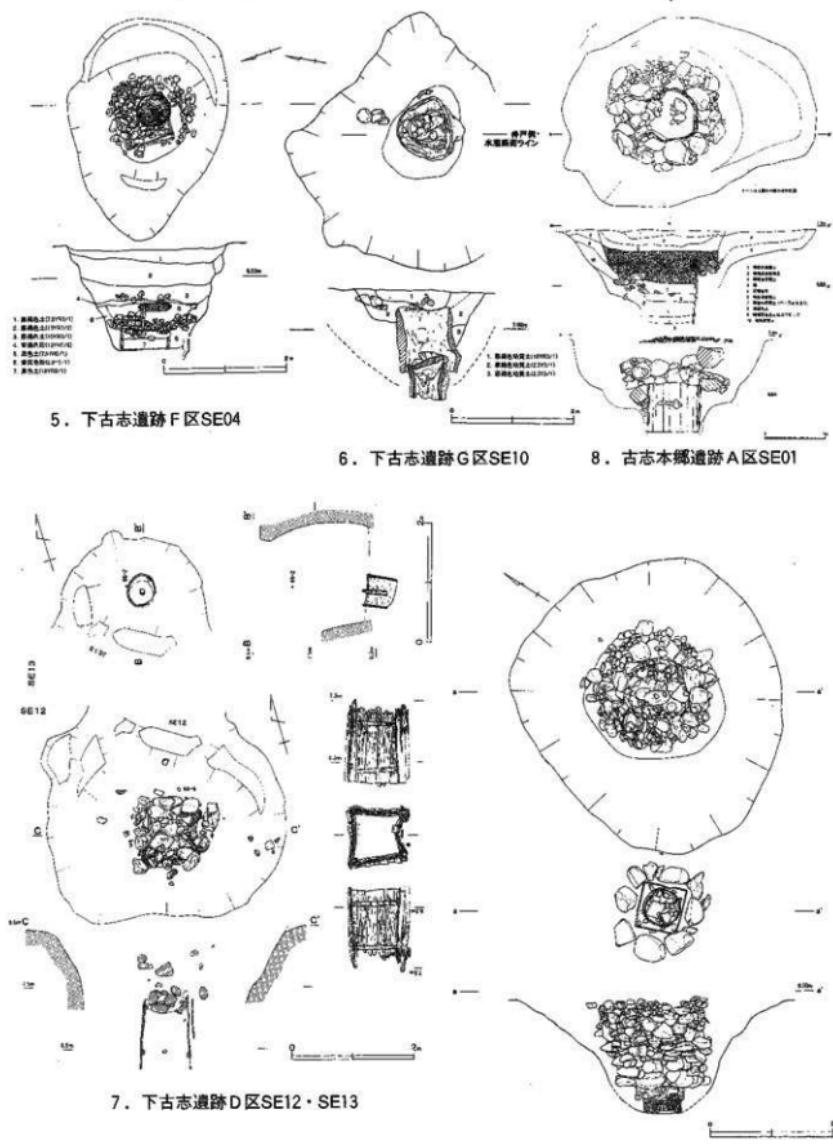


図12 古志遺跡群主要井戸実測図1 (1:80) ²⁸⁾

図13 古志遺跡群主要井戸実測図2 (1:80)²⁶

時期	遺跡名	調査区	遺構名	井戸側	形状・特徴	水	層	備考	文献	掲載頁	
弥生時代	A区	SK28	素掘り	円筒形	素掘り			1	18		
	下古志	C区	SE08	素掘り	すり鉢形	素掘り			1	156	
	G区	SK02	素掘り	円筒形	素掘り			1	408		
	古志本郷	K区	SK72	素掘り	すり鉢形	素掘り		7	283		
古墳時代			SK10	素掘り	円筒形	素掘り	縫合・ステップあり	1	86		
	下古志	B区	SK25	素掘り	円筒形	素掘り	祭祀あり?	1	92		
			SK28	素掘り	円筒形	素掘り		1	96		
	G区	SE03	素掘り	すり鉢形	素掘り	地上施設あり?		1	394		
奈良・平安時代	古志本郷	HII区	SK71	素掘り	円筒形	素掘り	土坑の可能性あり	9	104		
			SK84	素掘り	すり鉢形	素掘り	土坑の可能性あり	9	110		
		A区	SK29	素掘り	円筒形	素掘り		1	20		
			SK36	素掘り	円筒形	素掘り		1	23		
下古志		人溝内	不明	不明	不明	不明		1	53		
			SE01	素掘り	すり鉢形	素掘り	等級(1円+板敷)	1	114		
			SE03	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	117		
			SE04	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	119		
			SE05	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	121		
		D区	SE01	素掘り	円筒形	素掘り		1	250		
			SE04	素掘り	無支柱	素掘り		1	254		
			SE05	素掘り	円筒形	素掘り		1	257		
			SE06	素掘り	円筒形	素掘り		1	257		
			SE07	素掘り	円筒形	素掘り		1	259		
			SR08	素掘り	円筒形	素掘り		1	260		
			SR09	素掘り	円筒形	素掘り	石組の可能性も残す	1	261		
			SR16	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	270		
	古志本郷	C区	SE07	素掘り	陶丸方彌	板敷組	横枝残存	7	109		
			SE08内	素掘り	すり鉢形	板敷		7	110		
	古志本郷	J区	SK37	素掘り	すり鉢形	素掘り		9	175		
		5区	SK03	素掘り	すり鉢形	素掘り		15	127		
中世	田畠	6区	SF01	素掘り	すり鉢形	素掘り	ステップあり	16	141		
		A区	SK26	素掘り	円筒形	素掘り		1	17		
		B区	SK30	素掘り	円筒形	素掘り	木組の可能性も残す	1	21		
			SE02	素掘り	円筒形	素掘り	浄化施設あり?	1	117		
			SE01	石	石	石		1	163		
		C区	SE03	素掘り	すり鉢形	素掘り	「器多款、祭祀か?」	1	171		
			SE04	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	174		
			SE05	素掘り	円筒形	素掘り	浄化施設・祭祀あり?	1	175		
			SE06	素掘り	円筒形	素掘り		1	176		
		D区	SE02	素掘り	円筒形	素掘り		1	251		
			SE03	素掘り	円筒形	素掘り		1	252		
			SE10	素掘り	すり鉢形	素掘り	蓄水施設あり?	1	262		
			SE11	素掘り	円筒形	素掘り	新記あり?	1	261		
			SE12	横板組	横板組	横板組	新記あり?	1	266		
			SE13	素掘り	円筒形	物	祭祀あり	1	266		
			SE14	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	264		
			SE15	素掘り	円筒形	素掘り		1	269		
下古志			SE01	素掘り	すり鉢形	素掘り	溜池か? ステップあり	1	281		
			SE02	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	284		
			SE03	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	284		
		E区	SE04	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	284		
			SE05	素掘り	すり鉢形	素掘り	石組の可能性も残す	1	286		
			SK18	素掘り	円筒形	板敷組		1	287		
			SK07	素掘り	円筒形	素掘り		1	298		
		F区	SE02	素掘り	円筒形	素掘り		1	341		
			SE03	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	343		
			SE04	横板組	横板組	横板組	新記あり	1	344		
			SE01	素掘り	すり鉢形	素掘り		1	391		
			SE02	素掘り	すり鉢形	素掘り	溜池	1	393		
			SE04	素掘り	円筒形	素掘り		1	397		
			SE05	素掘り	円筒形	素掘り		1	398		
			SE06	素掘り	円筒形	素掘り		1	399		
			SE10	丸太削込み	—	丸太削込み	各1段	1	403		
		ZT	SK22	素掘り	円筒形	素掘り		1	405		
			SK25	素掘り	すり鉢形	物(半円)		1	407		
			SK21	素掘り	円筒形	素掘り	土坑の可能性あり	1	412		
			SE01	素掘り	すり鉢形	素掘り		2	31		

* 文獻はp6の参考文献に対応する。

表11 古志遺跡群井戸一覧表1

時 期	遺跡名	調査区	遺構名	井戸側	形状・支持	水 潜	備 考	文 紙	掲載頁
古志本郷	A区	SE02	素掘り	すり鉢形	曲物	曲物	曲物3段	7	38
		SE04	石縁	円筒形	石縁	石縁	旧丸太倒抜きあり	7	75
		SK19	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	77
		SE05	石縁	すり鉢形	石縁	石縁		7	106
		SE08	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	110
	B区	SK29	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	122
		SK33	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	123
		SE13	模板組	隅柱鉛込	模板組	模板組		7	275
		SK63	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	255
		SK64	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	282
古志本郷	C区	井戸1-1	模板組	隅柱横積どめ	模板組	模板組	壁面あり	8	38
		SE03	模板組	隅柱横積どめ	不明	不明		9	22
		SK31	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		9	31
		SK32	石縁	小明	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	9	32
		SK36	水掘り	すり鉢形	水掘り	水掘り	土坑の可能性あり	9	34
	H区	SK50	水掘り	すり鉢形	水掘り	水掘り		9	38
		SE04	模板組	円筒形横積どめ	不明	不明		9	92
		SE06	石縁	不明	不明	不明		9	93
		SK07	石縁	円筒形	不明	瓦縁等転用		9	93
		SE10	素掘り	円筒形	不明	不明		9	94
古志本郷	H II 区	SK12	石縁	円筒形	不明	五輪軸転用		9	94
		SE11	模板組	円筒形	不明	無記録あり		9	95
		SE13	模板組	隅柱横積どめ	不明	不明		9	95
		SE14	石縁	円筒形	石縁	石縁		9	97
		SE16	石縁	小明	不明	不明		9	98
	J区	SK67	素掘り	円筒形	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	9	103
		SK72	石縁	不明	不明	不明		9	106
		SK74	素掘り	すり鉢形	素掘り	多量の土器出土		9	107
		SK105	素掘り	円筒形	素掘り	素掘り		9	116
		SE01	模板組	隅柱横積どめ	模板組	模板組	J区SE02と切り合う	9	163
古志本郷	I区	SE02	石縁	円筒形	曲物	曲物(下り) + 横木	J区SE01と切り合う	9	163
		SK01	素掘り	すり鉢形	不明	不明		9	167
		SK04	素掘り	すり鉢形	素掘り	多量の土器出土		9	168
		SK35	素掘り	すり鉢形	不明	不明		9	173
		SK36	素掘り	円筒形	不明	不明		9	173
	II区	SE07	丸太倒抜き	-	丸太倒抜き	-		10	52
		SE02	模板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組	新旧・整地跡あり	10	51
		B区	SE05	石縁	円筒形	石縁	瓦縁等転用	1	120
		SE02	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		1	165
		SE07	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		1	177
古志本郷	G区	SE09	石縁	円筒形	横積組 + 模板組	横積組 + 模板組	1	401	
		SE01	石縁	円筒形	模板組	模板組		7	36
		SK34	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	123
		SK09	素掘り	すり鉢形	素掘り	作業スティップあり		7	222
		SE10	石縁	円筒形	横積組 + 丸太倒抜き	横積組 + 丸太倒抜き	新旧あり 戸山発見	7	224
	D区	SE11	模板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組		7	228
		SE01	石縁	円筒形	模板組	模板組		9	21
		SK28	模板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組	J I 区SK29より古い	9	29
		SK29	模板組	無支持	模板組	模板組	J I 区SK28より新しい	9	29
		SE05	模板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組	作業スティップあり	9	93
古志本郷	I区	SE05	模板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組	無記録あり	10	53
		D区	SR12	模板組	円筒形横積どめ	模板組		7	229
		B区	SR03	模板組	円筒形横積どめ	模板組		7	74
		SE06	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	108
		SK25	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り	逃か?	7	122
	II区	SK27	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		7	122
		SK42	素掘り	円筒形	素掘り	素掘り	井筋覆盤跡あり	7	234
		SK50	素掘り	円筒形	不明	不明		7	238
		井戸1-2	模板組	鉛込	模板組	模板組		8	40
		井戸1-3	石縁	すり鉢形	石縁	すり石転用		8	41
古志本郷	C区	SK37	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り		9	35
		SK104	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	10	49
		SK108	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	10	49
		SK109	素掘り	すり鉢形	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	10	58
		SK110	石縁	不明	石縁	石縁	土坑の可能性あり	10	49
	I区	SK111	素掘り	円筒形	素掘り	素掘り	土坑の可能性あり	10	49
		SE01	微板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組		10	52
		SE03	微板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組		10	52
		SE06	微板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組		10	60
		SK10	微板組	円筒形横積どめ	模板組	模板組	I区SE10などより先行	10	60
明	古志本郷	SK08	模板組	無支持	模板組	模板組	I区SE10などより先行	10	60
		SK09	模板組	隅柱どめ	模板組	模板組	I区SE10などより先行	10	60
		SE11	不明	円筒形	不明	不明	圓面のみの複載	10	60

表12 古志遺跡群井戸一覧表2

第3節 搬入系遺物

下古志遺跡第1次発掘調査では、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭にかけて、各地域から運び込まれたと考えられる遺物が出土している。その中でも特徴的なものを取り上げ、若干の考察を行う。

須玖式土器

D区SD05から丹塗りの施された破片が9点出土した。このうち4点を利用して復元したものが図14の1である。土器の詳細は「D区の調査」に記述しており【北部九州の須玖式土器である朱塗りが施された袋状口縁壺で、破片4点から復元したものである。頸部から胴部は丸く張り出し、裾すぼまりに底部へ移行するようである。頸部には2条のM字状突蒂文が貼り付けてあり、突蒂文より上には縦位の暗文が施される。頸部は細かい絞り痕

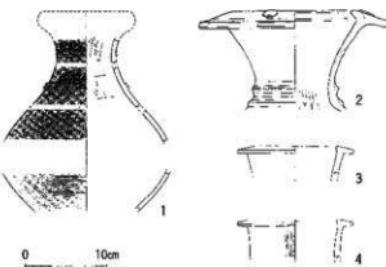


図14 出雲平野出土須玖式土器 (1:6)²⁹⁾

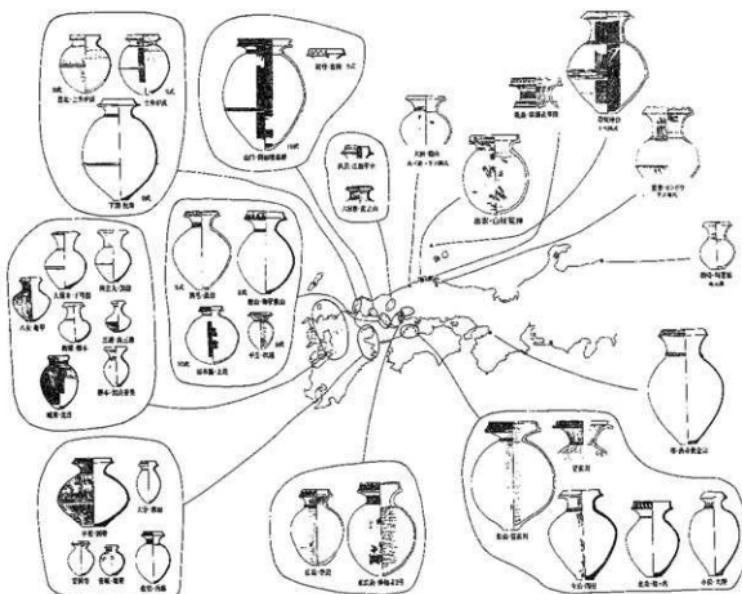


図15 西部瀬戸内系複合口縁壺・北部九州系壺出土分布図（弥生時代後期～終末期）³⁰⁾

が観察され、内面はナデ調整である。調整にケズリを使用していない点、黄色みを帯びた胎土などから須玖式土器圏内からの搬入品と考えられる。】³¹⁾、これらの小破片は須玖式土器圏内からの搬入品である。そして須玖式土器としては最東地域からの出土資料³²⁾である。各破片はバラバラの出土状況であり、共伴資料は正確には判断できないが、ほとんどが弥生中期後葉（松本Ⅳ期）のもので、これらと共伴すると考えられる。

須玖式土器は北部九州に本来の分布圏をもっており、山口県長門・周防両地域にもかなりの分布が見られ³³⁾、安芸（広島市中山遺跡出土の須玖I式壺³⁴⁾）にも搬入している。今回復元に利用した土器は、長崎県壱岐・原の辻遺跡出土の袋状口縁を有する細頸壺である。筆者は以前、弥生終末期の西部瀬戸内系複合口縁壺が白枝荒神遺跡で出土した折りに、須玖式以後の弥生後期～終末期の北部九州から西部瀬戸内系の壺の分布図を作成したことがある。図15がそれである。前記した須玖式土器の分布状況とよく似ており、弥生中期中葉～終末まで北部九州～西部瀬戸内圏域の土器移動状況は大差ないものと考えられる。

1は胎土分析を行っていないので、北部九州からダイレクトに来たものか、壱岐を経由したものか、長門・周防両地域から入ってきたものは、確定できないが、当時の社会情勢に反映したことが想定される。

塩町式土器

弥生時代中期後葉の遺構から出土している。本来は、備後北部の三次市塩町遺跡から出土した装飾性の強い土器を基本資料とし、備後北部で展開される土器形式と考えられていた。しかし最近、塩町式土器の特徴を有する土器が山陰西部（出雲・石見）の各遺跡から、在地の土器と共に出土することが判ってきた³⁵⁾。備後北部と繋がる江の川水系の遺跡、備後北部に近い山間部の遺跡などでは、多くの塩町式土器が出土している³⁶⁾。

山陰沿岸部の当該遺跡からも、塩町式土器と考えられる土器が出土している。広島県立歴史民俗資料館の伊藤実氏は、山陰系の土器から塩町式の土器を抽出するには、凹線文+刻目の組み合わせ文様を胴部上半に施した壺・鉢のみが有効であるとされている³⁷⁾。

その指標をもとに、D区SD05(5)・大溝(6・7)、F区SD01(8)、G区SD01(9~11)の7点が抽出できた。6は口径が大きいので鉢としたが、他の6点は壺である。D区出土の3点は在地土器に比べ色調が明るく選別された胎土のようでもあるが、

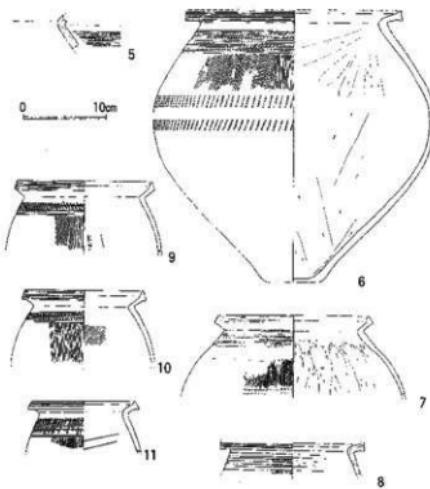
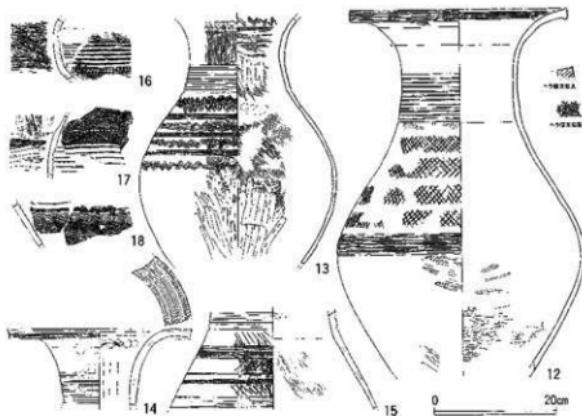


図16 下古志遺跡出土塩町式壺・鉢 (1:6)³⁸⁾

図17 下古志遺跡D区SD05出土ボーリングビン形広口壺 (1:8)³⁹⁾

が見られ、6~8はケズリっぽなしで新しい様相を呈するが、9~11は頸部下はナデ調整を施し、その下にハケ目調整及びナデ調整を施してケズリ調整を消しており、古い様相を呈している（5は風化のため不明）。これら7点は、山陰編年にてると若干の新古差はあるが松本IV-2の範疇である。

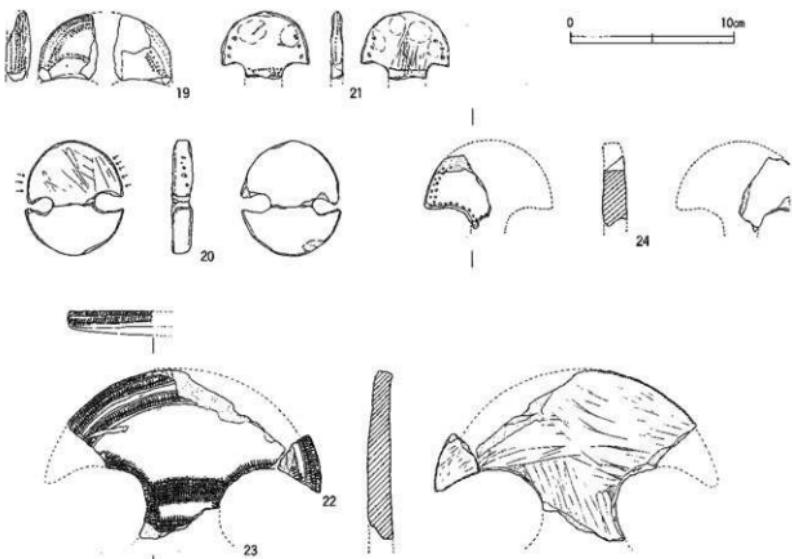
壺・鉢以外にも塩町式の影響を受けた、またはそのものと考えられる土器が見られる。無頸壺・直口壺・高杯などには凹線文+刻目の組み合わせ文様の施されたものが、当該期の遺構内から同じ器種と比較するとかなりの割合で出土している⁴⁰⁾。また当該期に出土する広口壺で、胴部が頸部から変化なくスムーズに移行するボーリングビン形の体部を有した装飾性の高い壺が、塩町式土器と伴うという事例を目にする機会を得た⁴¹⁾。このボーリングビン形広口壺は、数量的には少ないけれど以前から出雲地域では当該期に出土する器種と考えられていた。松本IIから散見されており、塩町式土器のルーツを求める好資料ではないかと考えられるが、筆者の能力不足で今回はこれ以上言及することはできない。

分銅形土製品

下古志遺跡からは6点5個体の分銅形土製品が出土している。D区遺構外(19)、E区SD13(20)、F区SK07(21)・F区遺構外(22)+G区SD04(23)・SD35(24)である。

分銅形土製品は、弥生時代前期末～後期の瀬戸内地域を中心に出土している遺物であることが知られている⁴²⁾。ここ数年島根県内でも資料数が増え、島根県古代文化センターにおいて山陰地方の集成がなされ⁴³⁾、下古志遺跡出土の5個体も掲載されている。また木本誠二氏は今までの研究をふまえ、様々な角度から分銅形土製品について言及され、大著⁴⁴⁾にまとめられている。以下、これを参考に当該遺跡から出土した分銅形土製品について考察したい。また木本氏と一部若干の見解の相違があるので、これも述べたいと思う。

F・G区出土の4点は在地土器と遜色ない。胴部上半に施される凹線文+刻目の組み合わせ文様の施文順には従来通り2種あり、凹線文→刻目には5・6・8、刻目→凹線文には7・9~11とほぼ半々に分かれ。口縁部の拡張規模は7点ともほぼ同じで、施される凹線文は2~3条である。ただし内面調整には若干の差

図18 下古志遺跡出土分銅形土製品 (1:3)⁴⁵⁾

一な形態・文様を呈するものは一組もなく、個々に特徴を持ったものである。完形品は20のみで、あとは破片である。

19は表面から裏面上縁部にかけて刺突による顔面表現を施したもので、刺突で表現したものは頭髪・眉・目と考えられる。直径8cm未満の小型で、厚さ1.5cmのやや厚手のものである。24も表面縁辺に刺突が施されているが、中央ではなく、木本氏曰くの下半部であると考えられる(実測図は報告書掲載のもの)。唯一完形品の20は、表裏面は無文であるが上端面の耳に当たる付近に各数個の刺突が施されている。これは完形品ではあるが、くびれ部で割れたものである。径7×6cmの小型品であるが厚さ1cmもあるため人為的に割らなければ割れないものと考えられ、分銅形土製品の使用方法を考える上で好資料となろう。21は5個体のうち最も薄手(5~7mm)のもので、作りも粗雑で指痕痕が残る。表裏面及び上端面に刺突が施され、表面には目とおぼしき表現の刺突痕が観察される。5個体のうち唯一穿孔が施されたものである。両耳に各3ヶの孔が表面から裏面へ穿たれている。欠損部分は20と全く同じ位置である。

23(+22)は凹線文と刻目の組み合わせを表面縁辺及びくびれ部と上端面に施したものである。これも上半部中央に施されていないので、下半部と考えられる(実測図は報告書掲載のもの)。この凹線文+刻目の組み合わせ文は、前文に記述したように、塩町式土器に施される文様構成である。胎土も在地のものに比べ色調が明るく選別されたものようである。以上より、23(+22)は塩町式土器と関わりをもつ分銅形土製品と考えられ、時期的に中期後葉と捉えたい。

以上5個体は、出土状況から時期を検討することはできず、唯一23(+22)のみ前記した通りである。出土した遺構及び周辺から検出されている遺構は、弥生時代中期後葉～後期前葉のものであり、分銅形土製品の中心時期と重なる。

出雲平野出土の分銅形土製品は、下古志遺跡5個体、吉志本郷遺跡1点、矢野遺跡1点、白枝荒神遺跡4点の4遺跡11個体である。これら古志本郷遺跡・矢野遺跡は当該期の拠点集落、下古志遺跡・白枝荒神遺跡は当該期の周縁単子集落と捉えられている⁴⁶⁾。このような拠点集落から周縁単子集落にまでも、吉備方面との文化交流が行われた結果、製品・情報が伝えられ、個々の集落内における祭祀用具としての分銅形土製品が存在するものと考えられる。

布留系土器

在地の土器が複合口縁を有するものを主流とする時期に、突如として出現する、「く」の字状口縁甕に特徴をもつ土器である。畿内型式の布留式土器と同様な動勢を窺うことができる⁴⁷⁾。

B区内の遺構からのみ出土している。共伴遺物からSI04出土の甕4点(44～47)が最も古段階のものと考えられ、定型化する前の布留系土器として布留0式⁴⁸⁾古段階としておく。他にSI03出土54、SK25出土62、SD49出土49の3点あるが、これらは在地の土器胎土と同じで、SI04に「く」の字状口縁甕の搬入後、模倣として在地土器と共に作られた可能性が考えられ、布留0式中段階とする。

SI04出土の4点は共通して、胎土・肩部の文様などが在地土器とは違い、特に焼成は良好で堅緻なものとなっている。胴下半部が残存しないためプロポーションは不明であるが、外反する直線的な口

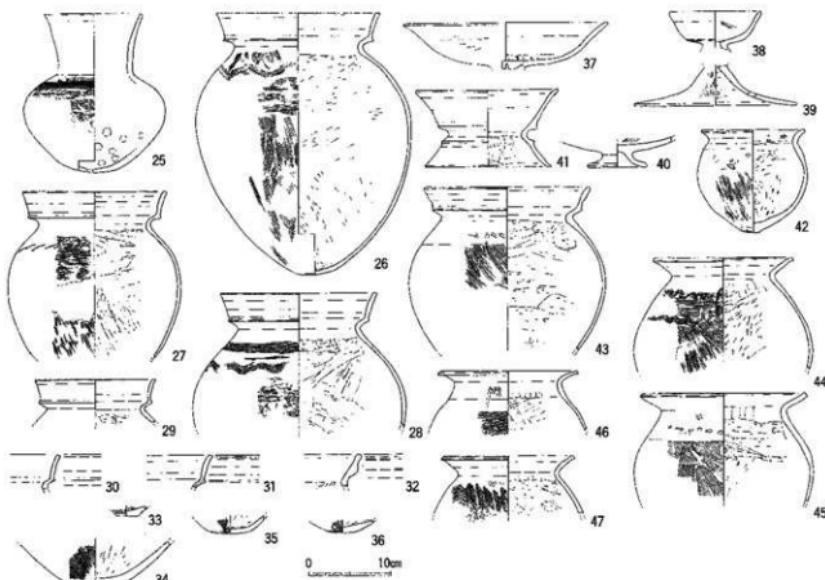


図19 下古志遺跡B区SI04出土遺物(1:6)⁴⁹⁾

縁（45のみやや内湾する）で、頸部は内面を伸ばして緩やかな屈曲をみせ、最大径位は胴部中央付近に下がるが、あまり胴部は張らず、長胴タイプのものとなろう。口唇部形状は次山淳氏分類⁵⁰⁾のbタイプ（口唇端部に上下に拡張した6mm程の内傾面をつくる。面は凹線状にくぼむ場合が多い）とdタイプ（口唇端部に幅4mm程の面をつくるもの。面をつくる際に上下に粘土がわずかにかぶる場合がある）を併せ持つようである。bタイプは備後の神辺地域に集中する傾向にあり、dタイプは広域に見られるという。

この4点には、口縁部のみ複合口縁を有する43壺が共伴している。胎土・焼成・肩部の文様などは「く」の字状口縁壺と同様なこの複合口縁壺は、シャープさを欠き不慣れな人物により作られたようで、4点と共に搬入されたものであろう。但し、肩部は膨らみをもち胴部中央付近で丸く張り出す。

また、SI04にはこれ以前には見られない畿内地域が出自である低脚高壺と考えられる器種（38・39）

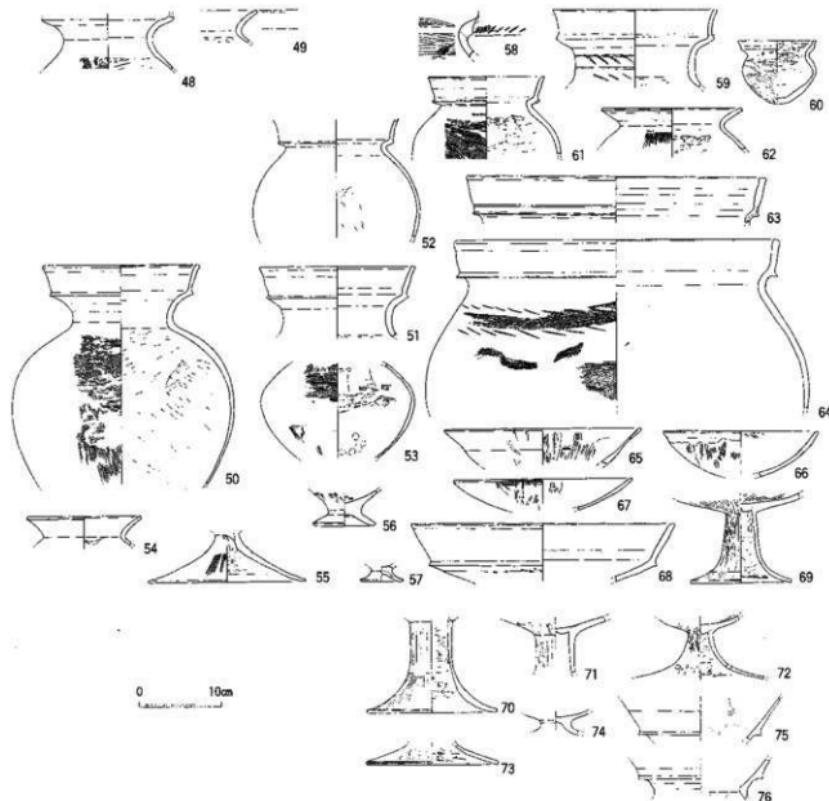


図20 下古志遺跡B区SD49(48・49)・SI03(50~57)・SK25(58~76)出土遺物 (1:6)⁵¹⁾

が出土していることと、「く」の字状口縁をもつ地域で亞流のひとつ³²⁾として時折見かけられるという42のような甕を伴っている。

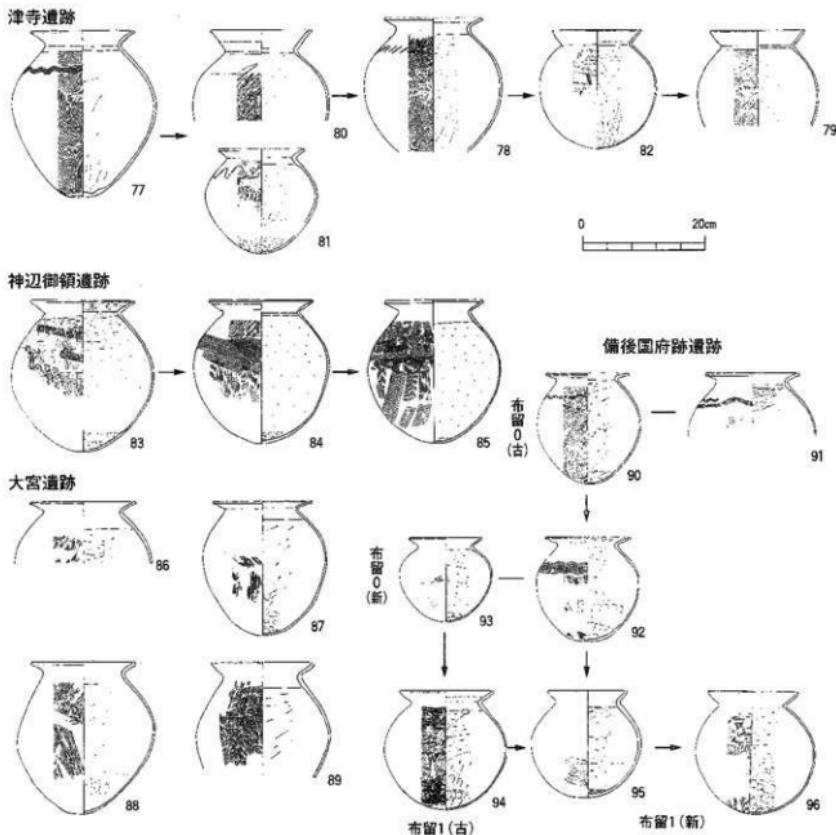
43・45の肩部に施されている在地ではほとんど見られない雨粒形列点文は、米粒形列点文と共に吉備南郡では伝統的に弥生時代中期末から施されており、1~6点施すものが中心である³³⁾。次山氏はこれと畿内の布留形甕に施される米粒形列点文及び雨粒形列点文は压痕の形状、押捺パターンも共通するとしている³⁴⁾。

以上を考慮し、SI04出土の4点の出自を求めて、備中地域の津寺遺跡³⁵⁾、備後神辺地域の神辺御領遺跡³⁶⁾、大宮遺跡³⁷⁾・備後國府跡遺跡³⁸⁾出土の土器（甕）資料を以下検討する。

津寺遺跡は、足守川流域に位置し、搬入品を含む多数の非在地系土器が出土している撫点集落である。早くから河内の庄内甕も搬入しており、それらが在地の短い二重口縁甕と共に、共生しつつ体部形態・調整方法などが変化していく様子が窺われる。「く」の字状口縁甕である溝-16出土77~79、溝-4出土80・81、土壙-139出土82は、下古志遺跡出土甕の外面上半部に施されたようなヨコハケ目調整を行っている。79・82は口縁部が若干内湾し口唇部が内側に引き出され、体部が球状を呈する確立された布留甕のようで、81は胴張りの寸詰まりタイプで肩部にはヘラ状工具による波状文が施されている。80はナデ肩を呈するが、外面に吉備在地甕に施される細いヘラミガキ調整をハケ目の後に行っており、78は頸部が逆「コ」の字状を呈するものである。77が唯一下古志遺跡出土甕とプロポーション的に近いようであるが、肩部に多条の波状文を施し、ヨコハケ目を波状文下にのみ施しており、若干様相が違う。吉備系の米粒形列点文及び雨粒形列点文はこれらには未施文であり、施文してあるものはほとんどが在地甕である。また全体的に肩が張り、胴部の短いタイプが主流のようで、ナデ肩の長胴タイプと考えている下古志遺跡出土の土器とは系譜が違うようである。

次に備後の神辺平野の東端部、高屋川が流れ込む付け根に位置する神辺御領遺跡では、古くから布留系甕が出土していたことで、知られている。これらの資料の中で、下古志遺跡出土甕の外面上半部に施されたようなヨコハケ目調整を行っている「く」の字状口縁甕は、E地点SD09出土の83~85などである。直線的な口縁部から口唇部は4mm程の面をつくり、85はつまみ上げ、「く」の字状に屈曲する頸部からナデ肩へと移行し、胴部中央付近で張り出し、底部へはやや膨らみをもちながら裾すぼまりとなるプロポーションを呈する。但し、基本はタテハケ目である。またこれらには吉備系の米粒形列点文が施されている。

同様に御領遺跡の南西に位置する大宮遺跡では、SE(井戸)出土の86~89を上げることができる。87~89は御領遺跡の甕と比べると胴の張りが少なくその分長胴のプロポーションを呈し、底部付近の膨らみも少なく底部も若干痕跡が残っている。但し、基本はタテハケ目である。以上の点より当該遺跡の上器は御領遺跡より古い様相を呈するようである。また胎土は、1mm大的乳白色長石を含み、白っぽい色調を呈し、在地産と考えられる。吉備型列点文は88のみに施されている。次に、86は、胎土に1mm大的乳白色長石を多く含むが、色調は暗橙褐色を呈し、風化はしているが焼成良好でバリバリした感覚のある他の土器と比較すると堅緻なもので、直線的な口縁部から口唇部は面をもち凹線状に窪みがあり、内面ケズリ調整は頸部より下がった位置から施され、胴部は張った感じを呈する。これは下古志遺跡出土45に最もよく似た様相を呈する。但し、外面肩部にはヨコハケ目も雨粒形列点文も施されてはいない。

図21 吉備地域の布留系土器 (1:8)⁵⁶⁾

同様に御領遺跡の西北に位置する備後國府跡遺跡では、SX604（土器溜まり）出土の90、及び外縁部にヨコハケ目調整は行われていないが、横位の波状文を施しているもの91・92を取り上げる。これら3点に施されているクシ歯状工具による多条の波状文は、山陰で普遍的に見られる文様である。下古志遺跡出土44にも多条の波状文が施されている。これら3点は、外反した直線的な口縁部で口唇部には若干の窪みのある面をもち、92はややナデ肩であるが、胴部は張り、膨らみをもって底部へ移行するが、90は92ほど膨らまず移行する。内面のケズリ調整は頸部以下に行われており、下古志遺跡のものとは違う。

以上吉備地域の土器を検討してきたが、下古志遺跡出土布留0式壺の出自を明らかにすることはできなかった。しかし吉備地域でも山陰と同様な壺の変容化を遂げていくことを再確認することができた。今後は地域を拡張して検討を重ねてゆきたいと考えている。

以下は、吉備地域での山陰と同様な壺の変容化を、備後国府跡遺跡出土壺を見てみることとする。布留0式壺から布留1式壺へと連続する様相が見て取れる。先に取り上げた土器と重複するが、まず布留0式古段階としての90は、長胴で、外反する直線的な口縁部を有し、やや肩が張り詰すばかりに底部へと移行する。布留0式新段階としての92は、前段階より胴部最大径位以下を内面の指頭により膨らませるがまだ長胴的で球形とはならない。また同時期で胴張りの寸詰まりタイプである601T(包含層)出土の93は、この胴部最大径位以下も指頭により膨らませ始めているが、体部はまだ逆三角形状を維持している。布留1式古段階としてのSD605出土94は、胴部最大径位以下を内面の指頭により膨らませ球形となったものである。布留1式新段階としてのSK607出土95は、胴部最大径位の張りがなくなり下半が下がったようになったもの。601T(包含層)出土96は内面の指頭により再び胴部がドに伸び始めるものである。直線的であった口縁部も95は若干内湾気味となり、96では内湾する。

以上のような壺の変容化は、山陰の複合口縁壺も布留系壺もほぼ同様に遂げていることが判ってきている⁶⁰⁾。

次に、C区出土の籠目をもつ土器(97)について若干の考察を加える。当該遺物は、遺構外出土のため詳細な時期決定はできない。しかし外間に籠の型押しによって付けられたと考えられる籠目が施された特殊な土器破片である。この項目に記したのは、このような籠目土器が、布留式土器に共伴するという事例が確認されているからである⁶¹⁾。

97は底部から器壁へと立ち上がった部位で、胴部外面及び底部に籠目圧痕が付着し、内面はナデ調整を施している。以下、角南聰一郎氏から若干のコメントを頂いた。

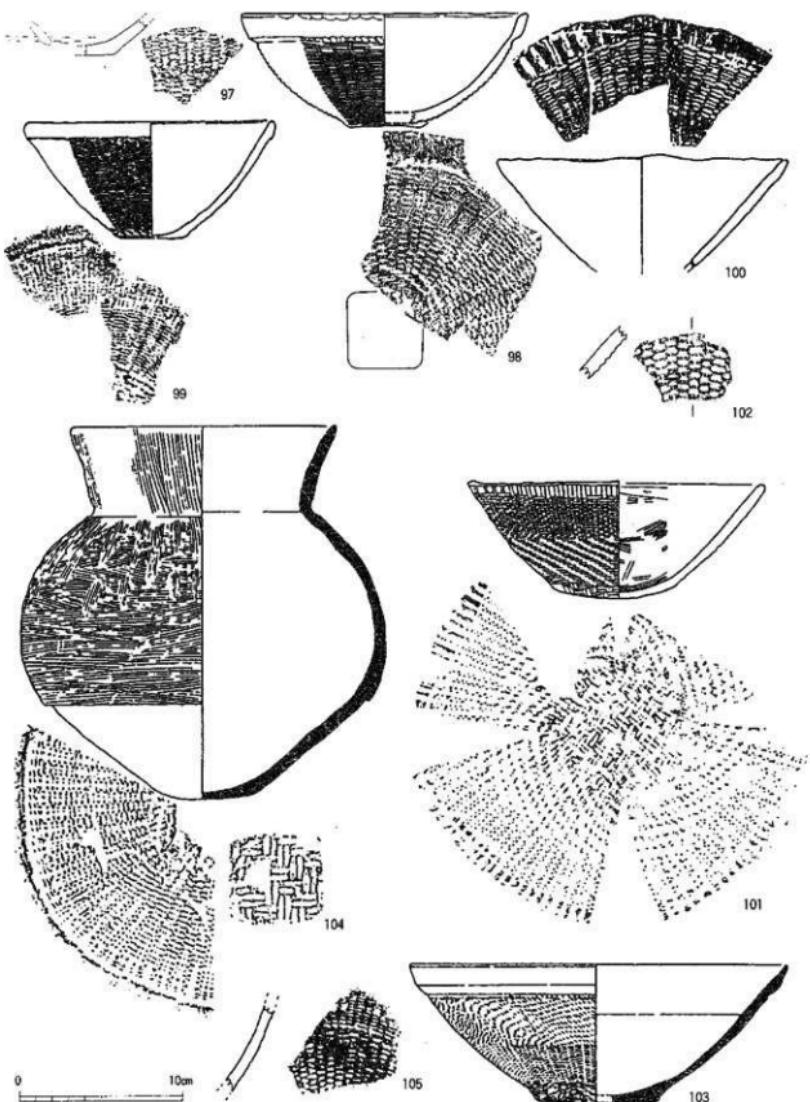
「地区は異なるが同一遺跡内から畿内系土器(布留式土器)が出土している点などを勘案すると本資料の時期は古墳時代前期と考えられる。つまり、古墳から出土する筒形土器は外外面とも籠目が付着し、且つ粘土板成形であるから該当しないであろうし、胴部下半や底部の籠目をハケなどで消そうとした痕跡が認められないので、単に土器製作の際に〈型〉として籠類を用いただけとは考えられない。籠目土器とはいえないだろう。本資料は籠形土器と考えるのが一番妥当ではないかと思われる。」

籠形土器の新出資料としては福岡県福岡市西新町遺跡⁶²⁾例がある。144号竪穴住居跡からの出土(98)で、時期は古墳時代前期と考えられる。当遺跡は畿内系土器が在地系土器を凌駕することで有名な遺跡であり、この他にも山陰系・吉備系・韓式といった他地域系土器が多く出土している。下志吉遺跡との関連で考えるならば、山陰系土器が注目されよう。つまり、福岡県築上郡大平村上唐原遺跡⁶³⁾(99)・熊本県山鹿市方保田東原遺跡⁶⁴⁾(100)の場合も、畿内系・山陰系の土器が伴っており、時期も古墳時代前期に限定される。また、愛媛県松山市宮前川北斎院遺跡⁶⁵⁾(101)も吉備系・山陰系の上器が多く出土しており同時期の資料と考えられている。逆に畿内で籠形土器が出土した大阪府茨木市溝呂遺跡⁶⁶⁾(102)からも山陰系土器が出土している。つまり、籠形土器の分布の仕方と山陰・九州・四国・畿内の各地域の地域間交流の仕方とは無関係とは思われないだろう。」

中略

籠形土器の出土例で最も古いのは、京都府京都市鳥羽遺跡⁶⁷⁾(103)や奈良県桜井市纏向遺跡⁶⁸⁾(104・105)の弥生時代終末=庄内式段階の資料である。現段階では籠形土器は弥生時代終末段階に畿内及び周辺で生成され、古墳時代前期段階に各地へと畿内土器の動きに伴って波及すると考えられる。」

以上、龍形土器の破片と考えられる97は、布留系土器との深い関わりをもつ資料であると考えられる。また山陰では初の資料である。

図22 龍形土器 (1:3)^(a)

註・参考文献

- 23) 本書のp9「弥生時代終末～古墳時代初頭」参照。
- 24) 本書のp9「集落の様相」では、あえて二つの標準集落を想定してみた。
- 25) 1)～10)、14)～16)を対象とした。
- 26) 宇野隆夫「[10 戸井考]『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真鷹社 1989の部分名称に基づいた。
- 27) 同上文献の分類を参考にした。
- 28) 1～7・9は1)、8は7)に掲載の図面を転載した。いずれも原図を縮小し1/80に統一した。
- 29) 1)は1)、2)は8)、3・4は出雲市教育委員会他「(社)中国建設弘扬会事務所建設に伴う天神遺跡第11次発掘調査」2001に掲載の図面を転載した。いずれも原図を縮小し1/6に統一した。
- 30) 出雲市教育委員会「白枝荒神遺跡 市道松崎下小山畠改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1997に掲載の図面を縮小して転載した。
- 31) 1)のp223参照。
- 32) 古志本郷遺跡第6次発掘調査人馬から塗瓦状口縁を有する壺2が出土しており、1とともに福岡市教育委員会の常松幹郎氏に実見していただいたところ、いずれも須玖式との範疇ではあるが、1が古段階、2が新段階であり、2の船上は地元産のものではないかというコメントを頂いた。
- また、天神遺跡でも、須玖式土器の範疇が1縁唇の破片が2点(3・4)出土しており、これは愛媛大学の田崎博之氏に実見して頂き、須玖I新段階からII古段階にかけてのものであろうこと、騎士は地元産のものではないかというコメントを頂いた。
- 33) 小山畜士雄「IV瀬戸内をめぐる九州と畿内の弥生土器編年」検討 2 北部九州と西部瀬戸内における弥生土器編年」「高地域性集落跡の研究」資料編 1979 学生社
- 34) 33)と同じ。
- 35) 出雲の弥生後討会「島根県出土の塙町式土器の検討」第4回談話会資料 1998
- 36) 石田為成「山陰地方における塙町式土器について」島根考古学会3月例会卒業論文発表会資料 2000
- 37) 伊藤氏から直接ご教示頂いた。
- 38) 1)に掲載の図面を転載した。いずれも原図を縮小して1/6に統一した。
- 39) 1)に掲載の図面を遺物が1/8になるよう縮小して転載した。
- 40) 1)でご確認頂いた。
- 41) 2001年3月に広島県内で行われた「弥生土器を読む会」に参加し、広島大学所蔵塙町遺跡・吉田町郡山城跡遺跡・庄原市利原遺跡出土の塙町式土器を実見した際にボーリングピン形広口壺が共伴しているのを確認した。また、石田為成氏からも同様なご教示を頂いた。
- 42) 東瀬「分銅形土製品の研究(1)」「古代古編」第7集 1971
- 43) 藤部智明・松本岩雄・守岡正司「山陰地方分銅形土製品集成」「古代文化研究」第8号 島根県古代文化センター 2000
- 44) 木本龍二「分銅形土製品の編年と様相」「徳島文理大学人文学部平成11年度修士論文」2000
- 45) 1)に掲載の図面を転載した。なお、19は1/3になるよう縮小した。
- 46) 田中義昭「第3章 中海・宍道湖岸西端地域における農耕社会の展開」「出雲神庭宍道神谷遺跡 第1冊 本文編」島根県教育委員会 1996
- 47) 次山淳「初期布留式土器群の西方尾関一中岡地区の事例からー」「古代」第103号 1997
- 48) 寺澤嵩「畿内古式土器の編年と二・三の問題」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊 矢部遺跡」奈良県教育委員会 1984
- 49) 1)に掲載の図面を遺物が1/6になるように縮小して転載した。
- 50) 47)と同じ。
- 51) 1)に掲載の図面を遺物が1/6になるように縮小して転載した。
- 52) 畿内・吉備地域の方々からそのような声を頂いたが、詳細は未確認である。
- 53) 岡山県古代吉備文化財センターの中野雅美氏からご教授頂いた。
- 54) 次山淳「波状文・列点文・布留形壺にみられる脣部文様の分類・系譜・分布ー」奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集「文化論叢 II」1995
- 55) 岡山県文化財保護協会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査12 桐原瀬跡 3」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書104」1996
- 56) 広島県立埋蔵文化財センター「神代御領遺跡—因幡井原継続施設に係る発掘調査報告書ー」1981
- 57) 広島県立埋蔵文化財センター「大宮遺跡発掘調査報告書第一・四反田地区 I・II」1988
- 58) 広島県立埋蔵文化財センター「備後府跡一確定地にかかる第6水調整概報ー」1988
- 59) 77～82は55)、83～85は56)、86～89は157)、90～96は58)に掲載の図面を遺物が1/8になるよう縮小して転載した。
- 60) 松山哲弘「小谷式円筒形・出雲平野における新資料からー」「島根考古学会誌第17集」島根考古学会2000において出雲の布留式から布留1式併行土器の整理がなされている。
- 61) 角南聯一郎氏による研究で明らかにされたつある。また氏にはご教授いただいた。
- 幾方正樹・角南聯一郎「『蘆北土器と荒形土製品』」「奈良市埋蔵文化財調査芥一紀要 1997」奈良市教育委員会 1998
角南聯一郎「弥生～古墳時代前期の鏡口・荒形土器」「香川考古7」「香川考古刊行会 1999
- 62) 蓮麻輝行ほか「西新町遺跡 II」福岡県教育委員会 2001
- 63) 小池史哲「七所原遺跡 I」「福岡県教育委員会 1995
- 64) 中村幸史ほか編「方保田東原遺跡」山鹿市教育委員会 1982
- 65) 作山一耕編「斎院・古照」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998
- 66) 今田英美「瀬戸内遺跡(その1・2)」(財)大阪府文化財調査研究センター 2000
- 67) 鈴木久男・吉崎伸「鳥羽郡宮跡102次調査」「昭和59年京都山埋蔵文化財調査概要」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 68) 豊岡享之「大和考古資料目録18 鷹脛跡調査資料(1)」「奈良県立埋蔵考古学研究所付属博物館 1991
- 69) 97は1)、98は62)、99は63)、100は64)、101は65)、102は66)、103は67)、104・105は68)に掲載の図面を転載した。

第4章 総括

古志遺跡群の発掘調査

古志遺跡群内では、斐伊川放水路建設事業や道路改良事業などの大規模開発が集中したため、近年、島根県教育委員会や出雲市教育委員会によって、立て続けに発掘調査が実施された。このため、遺跡群内の下古志遺跡、古志本郷遺跡、田畠遺跡の発掘調査次数はそれぞれ、第2次、第13次、第2次を数えるに至り、多くの成果が得られている。

これらの発掘調査の大きな成果のひとつとして、各遺跡から弥生時代の環濠と考えられる大溝が複数検出されたことが挙げられる。大規模な弥生集落が存在する可能性を示唆し、多量の出土遺物を伴うことから、膨大な資料を追加する結果となった。また、古志本郷遺跡では、奈良時代の郡庁の可能性が指摘される大型掘立柱建物跡が検出され、付近が神門郡衙の比定地と考えられるようになった。これらの遺構は、ともに範囲確認のための追跡調査が行われており、当初の想定を支持する調査成果が得られている。さらに、古志本郷遺跡では弥生時代前期の遺構も発見されており、遺跡の出現時期が明らかになりつつある。また、中世土師器の編年案が示されるなど、様々な成果があがっている。

古志遺跡群内での大規模開発に絡む一連の発掘調査は、平成13年度（2001）をもってすべて終了した。よって、近年中に報告書が発刊されることとなろう。これらの報告書が出そろった後に、再度、遺跡群内全体を見渡して、各成果について様々な角度から広く検討される必要があろう。

下古志遺跡の時期

第2章では第1次発掘調査成果を元に、下古志遺跡の中核時期を弥生時代中期後葉、弥生時代後期、弥生時代終末から古墳時代初頭、奈良・平安時代、中世、近世以降の6時期に分割して、各時期の集落様相について考察した。また、弥生土器に的を絞り、その変遷を概観するための変遷図も示した。そして、参考のために第2次発掘調査成果の概要を示した。さらに、最終的に下古志遺跡と田畠遺跡における遺構分布から、中核時期ごとの集落の中心位置や、遺構が分布する範囲の概略を模式的に示したが、精度の低さは否めない。よって、今後の課題としては、ここで示したものを元に、周辺で発掘調査が行われればその成果を盛り込み、各時期の遺構分布範囲を正確につかむべく、図面の精度を上げていく必要がある。

その他の成果

第4章では古志遺跡群内で検出された環濠と考えられる大溝、井戸、搬入系遺物について、個別に考察を進めた。

環濠と考えられる大溝については、下古志遺跡と田畠遺跡で検出されたものを対象にして、それぞれの共通点から、その繋がりについて案を示した。今後の課題としては、さらに追跡調査を行うことで、確認できない大溝の繋がりを探り、どのような様相を呈しているのかを解明する必要があろう。また、環濠と考えられる大溝は、天神遺跡⁷⁰⁾や小山遺跡⁷¹⁾など、他の遺跡群に属する遺跡でも検出されている。これらを比較検討して、出雲平野での集落の様相を整理することが、今後の課題となろう。

井戸については、古志遺跡群内検出のものをとりまとめ、その変遷について案を示した。時期が下るほど、井戸側・水溜において、素掘りの割合が減少し石組・木製のものが増加していく傾向がうかがえた。なお、小山遺跡⁷⁰⁾では、古志遺跡群内では発見されていない、陶器製の井戸側を有する井戸も検出されている。収集範囲をさらに広げ出雲平野での変遷をつかむことが、今後必要となろう。

搬入系遺物では、下古志遺跡で出土した須歎式土器、塙町式土器、分銅形土製品、布留式土器、について項目を設定し考察を進めた。須歎式土器は、近年、古志本郷遺跡、天神遺跡からも出土している。現時点では出土数が少ないため、今後の発掘調査での出土例には留意の必要があろう。塙町式土器については、神戸川水系と江の川水系の河口付近の遺跡で、出土割合に大きな差が見られる⁷¹⁾ことから、神戸川水系の出雲平野では広く採用されなかった印象を受ける。今後はこの要因について検討の余地があろう。分銅形土製品は、下古志遺跡から6点5個体と比較的多く出土している。出雲平野では他に古志本郷遺跡、矢野遺跡、白枝荒神遺跡からも出土していることから、集落内における祭祀用具として用いられたことが想定されている。布留式土器については、これがこの地で採用され始める時期と、集落が衰退し始める時期が一致する。関連は不明だが、今後検討の余地があろう。なお、今回、取り上げなかつたが、F区SD01の出土遺物には、在地のものとは系譜が異なると思われる遺物が認められるため、この系譜も辿る必要があろう。

いずれにしても、これらの遺物から、弥生時代中期後葉及び弥生時代終末から古墳時代初頭に、広範囲での交流が行われていたことは間違いない。下古志遺跡は、かつての神戸川が神門水海に注ぎ出る河口付近左岸に位置していたと考えられる。よって、時期を問わず他地域との交流においては、重要な位置を占めていたと思われる。弥生時代の下古志遺跡の位置づけは、広い視野から既に論じられている⁷²⁾。今後は時期ごとに、他の遺跡との比較などによって、さらに詳細にこの遺跡の役割や位置づけについて、検討を続けていく必要があろう。

おわりに

本書は下古志遺跡第2次発掘調査の報告書において、盛り込めなかった考察を加えるべく作成したものである。しかし、取り上げられなかつた項目も若干残す結果となった。特に弥生時代の土器において、タタキ調整の痕跡が認められることなどは、わざわざ奈良文化財研究所の深澤芳樹氏からご指摘いただいたにも関わらず、紙面や時間的制約によって言及することができなかつた。また、全般に根拠に欠ける想定も敢て行っている。力量不足は承知しているが、本書がたたき台となり、下古志遺跡の性格がより詳細に解明されればとの思いからの勇み足であることを、ご理解頂ければ幸いである。

なお、最後になったが本書の作成にあたり、内田律雄氏、会下和宏氏、角南聰一郎氏、中川寧氏にお世話をなつた。記して謝意を表しておきたい。

註・参考文献

- 70) 出雲市教育委員会「出雲市駅付近連続立体交差事業地内 天神遺跡第7次発掘調査報告書」1997ほか
- 71) 出雲市教育委員会「平成12年度 四條幼稚園改築工事に伴う小山遺跡第3地点第4次発掘調査報告書」2002ほか
- 72) 出雲市教育委員会「市道渡鷲平野線改修工事に伴う小山遺跡第2地点発掘調査報告書」1998
- 73) 石田為成「山陰地方における塙町式土器について」島根考古学会3月例会卒業論文発表会資料 2000
なお、出雲の弥生検討会 第4回談話会「島根県出土の塙町式土器の検討」1998において実見の機会があった。
- 74) 田中義昭「第3章 中海・宍道湖西西部域における農耕社会の展開」『山陰神庭宍道湖遺跡 第1冊 本文編』島根県教育委員会 1996

写 真 図 版



古志遺跡群航空写真（上が北）

図版2 下古志遺跡



C区 SI01 壺穴式住居跡



A区 SB04 掘立柱建物跡



B区 SB06 布掘り掘立柱
建物跡



F区 SD01 断面V字形



D区 大溝 断面W字形



E区 SD13 断面逆台形

図版4 下古志遺跡



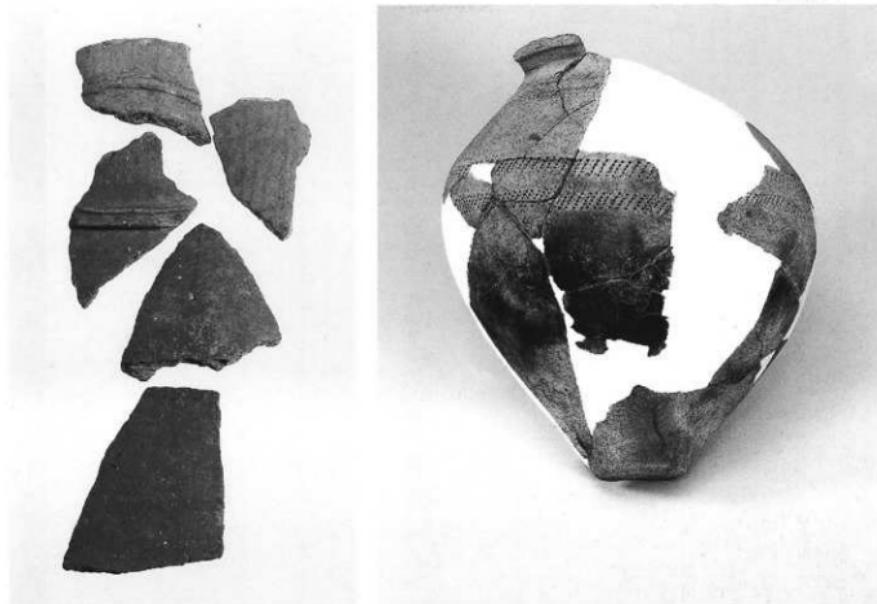
B区 SK10 井戸祭祀跡



D区 SE04 木組井戸側
・水溜

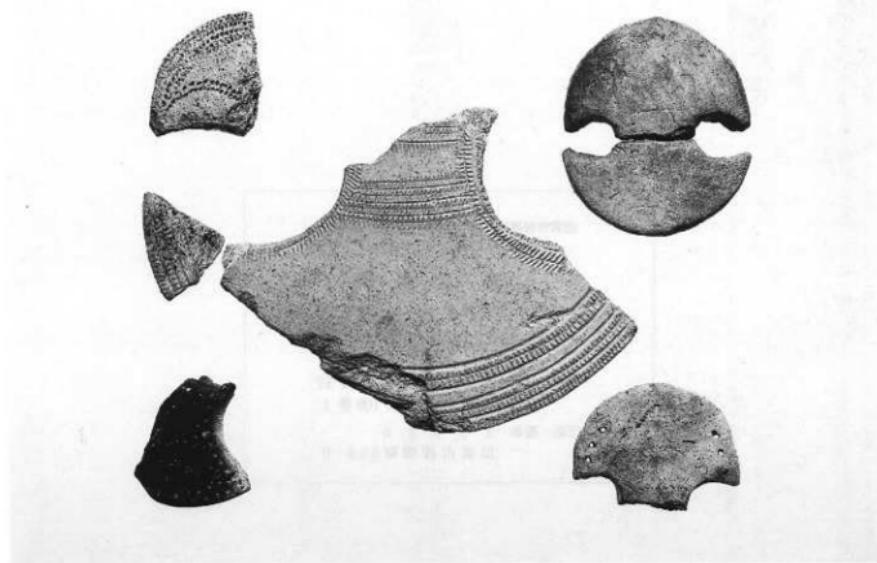


G区 SE09 石組井戸側



D区 SD05出土 須玖式土器

D区 大溝出土 塩町式土器



下古志遺跡出土 分銅形土製品（全部）

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

下 古 志 遺 跡

- 考 察 編 -

平成14年（2002）3月発行

編集・発行 出雲市教育委員会

出雲市今市町109番1

印刷・製本 オリジナル

出雲市波橋町618-9